

第六章 光の河Ⅲ

1

タケルは眼を覚ました。

ログハウスの天井を支える丸太が目映った。

――帰ってきた。

――いや、夢から覚めたのか。

タケルはしばらく余韻に浸っていた。

顔を横に向けると、寝袋に両足をつっこんだ新出博士が、柱を背にしてうつらうつらと体を揺らしている。まちがいでなく現代だ。

タケルは自分がくるまっていた寝袋のジッパーを降ろして上半身を起こした。ひたいから何かがぼとつと落ちた。そのとき初めておでこに湿ったタオルが乗せられていたのに気がついた。

タケルの身じろぎに博士も眠りから覚めた。

「おお、タケル。おはよう」

タケルは久しぶりに会ったような錯覚を感じた。

「博士、ただいま」

「なにがただいまだ。どうだ、調子は」

訊かれてタケルは小首を傾げた。

「んーいい感じ。なんかスッキリしてます」

「スツキリもないもんだぞ。二晩もうなされてたんだからなあ」

タケルは驚いた。「そんなに？」

「そうじゃよ。おとついの晩に倒れて熱出して、ずっと『熱い熱い』とうわごとを言いながら寝続けとった。このままじゃいかん、病院へ連れていこうと思ったんだが、この雨風だ」
あめかぜ

そういえばさつきからずっと雨の吹きつける音がしていた。どこか外壁がはがれているのか風がバタバタと鳴らしている。

「昨日が台風の直撃日だったようだ。そりやもうむちゃくちゃな降りだったぞ。下の道まで様子を見に行っただが、敷地を出てすぐのところで土砂崩れが起きとった。今やここは陸の孤島だ」

どおりで博士のヒゲも髪の毛もくしゃくしゃだ。

「そんなわけで、タケルには気の毒だったが、完全に足止めくらわされとったんだよ」

言いながら博士はタケルのひたいに手を当てた。

「……うーむ、熱はひいたようだ。顔色もいい。何も食うとらんのに前より元気に見えるのお」

とたんにタケルのおなかがグーと鳴った。

「そうだろそうだろ」

博士はにつこり笑った。しかしすぐ真顔に戻ってタケ

ルに顔を近づけた。

「どうだ、歩けそうか？」

タケルは寝袋を這い出して立ち上がってみた。不思議と気力も体力も充実している。

「ほお……若いのお。これなら少々の山歩きは大丈夫だな」

2

「山歩き？　ここは陸の孤島なんですよ？」

すると博士は、やおらゆつくりと立ち上がり、思わせぶりな笑いを見せた。

「ここから直で町に降りられないという意味では孤島だ。ふつうの感覚で言えば、な」

タケルはますます分からなくなった。それを見て博士は頭をかいて、

「ははは、秘密でもなんでもないんだが、じつはな、ここから尾根づたいに歩いたところに、つい先日新しい基地を作った」

「秘密基地……」

「だから秘密じゃないと言うとる」

「そこに行くの？」

「理解が早いのお。そうだ、行こうと思うとる。基地に

は山の観察用にいろんな装備も置いてあるし、非常食もたくわえてある」

にわかにタケルの顔が輝いた。秘密でも秘密でなくてもいい。基地という言葉は抵抗しがたい力でタケルの心を魅了した。

ぴよんと立ち上がると、タケルはリュックに手を伸ばした。

「行きましょう！ 博士」

「……なんでそんな急に元気になれる？」

雨も風も相変わらず強かったが、博士によれば昨日の半分ほどだという。ふたりはレインコートを羽織って口グハウスをあとにした。

尾根づたいの道は険しかった。道中はほとんどが森林の中だった。それでも博士は見渡せる山の形と磁石を頼りにずんずんと歩を進めていく。さすが自分の庭だと豪語するだけのことはあるなとタケルは感心した。

道すがら、タケルはまだ記憶に鮮明な昨夜の夢のことを話した。火山の噴火に追われて棲み家を出て“溝の帯”に下りたこと。湖を泳ぎわたったが流されて黄金がきらめく地底の洞穴をさまよい歩いたこと。溶岩流を越え、鍾乳洞に分け入って、ついに地底世界をこの眼で見たこと。最後にマグマに追われながらも無事脱出できた

こと――。

「それで、ベージュ族はブラウン族と友達になったんです」

話し終えたタケルは、自分が貴重な体験をしたことを実感した。あれほどのピンチを切り抜けてきたんだから怖いものは何もない。胸を張ってそう言える気がする。

「なんだか急に大人になったみたいだな」

「うん、姉さんにもそう言われた」

タケルの答えに、博士はうんうんとうなずいた。

3

じっさい博士は驚いていた。

タケルはもっと幼い頃、田舎を走り回っていたというもの、ここ数年はいわゆる鍵っ子だったはずで、それを証明するように、研究所を出てログハウスに到着するまでのタケルの足取りはおぼつかなかった。

それがどうだ。いま歩いてる山道の方がよほど険しいのに、タケルときたらサツサツと登っていく。博士は登山の経験も少なくないので、タケルの足の運び方、手のかりのつかみ方に寸分の無駄がないことは見れば分かる。

不思議でならない。何がこの子を変えたのか。夢の話は聞いた。しかし登山用の睡眠学習など聞いたことがな

い。考えられるとすれば……初めてのひとり旅や、ここにたどりつくまで体験したことが、タケルの天分を開く“きっかけの一步”になったとでもいうか――。

「博士」

突然呼びかけられて、新出博士はビクツとした。

「ん？ なにかな」

「どうしたの。なんだかこわい顔ですよ」

「ああ……いやすまん、考えごとをしとった」

博士は顔のこわばりを照れ笑いでごまかした。

「そうそう、タケル、話してなかったかな」

「なんででしょう？」

博士はタケルの大人びた視線をかわそうとして、別の話題を持ち出した。

「じつは基地のそばに、いいところを見つけたんだよ」

「え、え、なになに」

「ふふふ、プライベート・レイクさ」

「プラ……レ？」

「日本語でいうところの“わしの湖”だよ」

「博士の？」

「そう」

「すごい！ 博士しか知らない秘密の湖なんですか？」

「タケルは秘密が好きだなあ。そのとおり」

「ひよつとして竜神様が棲んでるとか」

「それは分から……いや、おるかもしれんぞ」

「光りゴケが底で光ってたり」

「いや、苔は生えてないと思う。そのかわりに、ホタルがおる」

「えー、見たい見たい！」

タケルは博士にしがみつかんばかりに驚喜した。

「わかった、わかった。基地に到着したら連れていってやろう」

おっしゃーとタケルはガッツポーズを作った。

4

雨は止み、風だけが木々の葉を鳴らしながら、低くたれ込めた雲を押し流していた。すでに尾根をふたつばかり越えた。健脚のふたりもそろそろ疲れが出始め、歩くスピードが遅くなった。話す言葉もしげんと現実感を帯びたものになっていた。

「博士」

「なにかな」

「基地に着いたあと、どうするんですか？」

「うむ、昼飯を食って、しばらく休憩したら山を反対側に下りようと思う。それなら誰に見つかる心配もあるまいしな。ちよつと遠いが暗くなる前には向こうの町にた

どりつけよう——それからあちこちに連絡して——置いてきた動物たちも明日には助け出せるだろう」

「うん」

「さつき話した湖は、基地のそばにある。そこでランチとしゃれこもうか」

「やった」

ふたりは木陰に腰掛けて休息した。体じゅう汗まみれ泥まみれだ。タケルはドリンクをリュックから取り出し、博士と交代で飲み干した。

「それにしてもタケルが猿人の世界に行った話は興味深かったなあ」

博士はうらやましそうにため息をついた。

「あれはやっぱりアフリカの話でしょうか？」

「そうかもしれない。金の鉱脈も出てきたし——エチオピア、ケニア、タンザニアのどこかか」

「博士はアフリカに行ったことは？」

「うむ、十年ほど前に二度ばかりな。今も友人がそこで研究しておる。また来いとしつこく呼ばれているよ」

「へえー、博士にも友達がいたんですね」

「それはひどいな、わっはっは」

おどけて笑う博士とは対称的に、タケルの心は沈んだ。「ぼく、引越し先では、まだ新しい友達ができないんです」

「そうか……友達なんてな、しぜんにできるもんだ。焦ることはない」

「うん……」

タケルは足元の石をコツンとけた。石は斜面をころと転がり落ちていった。

「タケル、さっきの話だと、大冒険の中で猿人の友達が何人もできたそうじゃないか」

タケルの脳裏に、姉や大男やサユリの顔がよみがえった。むしように恋しくなり、タケルは熱くなった目頭をこすった。彼らとは言葉を使わずに心で通じ合った。あれが友達というものなのか。

5

博士はタケルの肩に手をまわした。

「ことわざに “まさかの友が真の友” とある」

「まさかの……」

「そうだ」

博士は立ち上がって、尻の土を払い落とした。

「まあ、ゆっくり行こうや」

「はい」

タケルも立ち上がった。少し肩の力が抜けて楽になったような気がした。

ふたりは風に飛ばされそうなフードを両手で押さえ、再び、森の中の道なき道を歩き始めた。

昼前、ようやくふたりは到着した。

博士の言う“基地”は、タケルの見たところ、全然それらしくなかった。白くて真四角のコンクリート作りの平屋建て。ただそれだけが尾根の見晴らしのいい場所にポツンと建っていた。

「もとは天気なんかの測候所だったんだ。わしが頼んで使わせてもらってるんだよ」

アンテナが立っているところは確かに測候所っぽい、少し曲がっている。いくつかある窓はヒビが入っていたが、すきま風の心配はなさそうだ。

博士はポケットから入口の鍵を取り出すと、大きな南京錠に差し込んで開け、壁に埋めた鉄の輪と扉の把っ手に巻きつけてある太い鎖をはずした。

「秘密の基地へようこそ……といってもアニメに出てくるようなものとは違うがな」

中はこざっぱりしていた。博士の性格上、使う前に大掃除したのだろう。殺風景だがきれいに整頓されていた。入ってすぐがメインの研究室で、元はさまざまな機器が据え付けられていたと思われる。今は広い空間に整理棚がいくつかあるだけだ。部屋はほかに調理場と寝室の

ふたつがあった。調理場にはガスがあり、簡単な料理なら作れそうだ。寝室の二段ベッドには、あちこちが破けたクッションが乗っていた。他にトイレと風呂。飲料水は屋上に設置されたタンクに雨水をためて使うのだという。

「地下室があるんだよ」

懐中電灯を持って研究室から階段を下り、ドアを開けると十畳ほどの地下室があった。博士が隅に置かれた発電機を始動させると、基地のすべての部屋の電灯がいつせいにともった。

「ははは。まさに等身大の基地だよ」

地下室には頑丈そうな棚があり、錠前をはずすと中には肉やら魚やらの缶詰が山ほどあった。

「うわあ!!」

ふたりの胃袋が盛大に鳴り出した。

6

ふたりは積み重なった缶詰に手を伸ばしてフタを開けると、あつという間に二つほどたいらげてしまった。食道を牛肉とさんまが混じ合って降りていくと、タケルも博士も「ああ」と声をあげた。

博士は持ってきた手提げ袋に缶詰を十個ほど入れ、缶

詰の横に山盛りに置いてあつた乾パンを放り込むと、タケルをうながして階上にのぼった。

「博士、ちよつと待って」

測候所の外へ出ようと玄関の扉を開けたとき、レインコートの防水ポケットに入れておいた携帯電話がヴヴヴと振動した。取り出すとメールが着信していた。

「すごい。こんな山の中なのに」

メールは祖父ちゃんからだつた。発信時間は驚くことに二日前だ。『連絡請う』とひとこと。

留守電の方も確認してみると二件あつた。一件は同じく二日前で、心配しているから連絡しておくれという内容。そしてもう一件は昨日。

『タケル！ 無事なのか？ いま車に乗せてもらて山形に向こうとる。運転は井沢先生じゃ。相談したら行つてくれるちゆうてな。そつちの警察にも探してくれとお願いした。いま朝やから夕方までには着くと――』

電話はそこでプープーという音を鳴らして切れた。液晶画面に「圏外」と表示されている。

「ふだんなら電波状況は悪くないんだが、台風のせいでダメなようだな」

タケルは留守電の内容を博士に教えた。

「うーむ。やはりこれは、早く下山して安心させてあげないといかん」

携帯は二度と通話OKにならなかった。タケルは祖父ちゃんだけでなく、井沢先生まで心配させたことを申し訳なく思いながらも、どこかうれしい気持ちを抑えられなかった。

とにかく腹が減っては動けない。ふたりは食べ物を持って測候所を出ると、歩いて二三分という博士の『わしの湖』めざして米沢側の斜面を滑り降りていった。

そのとき測候所の反対側に密生している藪がザワザワと揺れたことにふたりはまったく気づかなかった。

「すごい……」

思わず息をのんだタケルの眼前に、深い木々に囲まれた湿原が広がっていた。湖水を吹きわたる風がミズバショウや色とりどりの花々を揺らしている。澄み切った空気の中に横たわる静謐さを、音のない交響曲が盛り上げていた。

7

ふたりはそんな風景を前にして水端に腰かけると、雰囲気に全くそぐわない加工食を食べ始めた。

空に低くたれこめた雲が早足で駆け抜けていく。天気によければもっと鮮やかな景色だったろうにとタケルは

残念に思いつつ、逆にそれが妖しげな美しさを醸し出していることも否定できなかった。

周囲に茂る木々が遠近感を狂わせるのか、本来はさほど広くない湿原を、まるで湖のようなパノラマに仕立て上げていた。

湖——タケルはベージュ族の仲間と泳ぎ渡った。溝の“帯”の湖を思い出した。タケルの心はどうしてもひっかかるものを感じていた。どうしてあんな夢を見たのか。それも毎回続編になつて。

《——いまにわかる》

心の声はそう言った。でもいまだに分からない。

「タケル」

博士に呼びかけられて、タケルは現実の世界に引き戻された。

「ひとつ、タケルに話さねばならんことがある」

「なんでしょう」

「タケルの父さんのことだ」

「父さん？」

タケルは驚いて博士の顔を見返した。そして博士の真剣な横顔に気づき、居ずまいを正した。

「どこから話せばいいかな——。まず、測候所を借りてまでここで何をしてるかを説明しようか。」

数年前からわしはこのあたりの山々をよく歩きまわっ

とった。もちろん動物が目当てでな。昨年の春頃からは鳥にしぼってあちこちを歩いて観察しとった。カナダの友人が、森の中で鳥がさえずる声を録音したものを解析してその種類を言い当てるといふソフトを開発しとるんだ。これを試しに使ってくれと頼まれたんだ。それで山に登るたびに録音してはソフトに入力しとったんだが、あの頃はてんでダメだった。でもな——そのときにタケルの父さんと会ったんだ」

「山の中ですか？」

「うむ。当時の父さんはダム建設の調査で、よく山に登っていた。もともと足腰の強い人だったから適任だったんだろう。わしは父さんに声をかけた。父さんも快くダム建設計画の図面を見せてくれた。それで驚いたんだが、もし計画どおりにダムができたなら、この湿原もふくめて貴重な自然が失われることになる。わしはそう父さんに言った。父さんは驚いてわしの話に耳を傾けてくれた。父さんはダムを作ってはいけないとまで言ってくれた。それから何度か山をいっしょに歩いた。もちろんこの場所にもお連れしたよ。ところが——」

8

「ある時期からタケルの父さんの姿を、山で見かけなく

なった。たいていは来山する直前に電話で連絡をくれていたんだが。東京など県外への出張も多いと聞いていたから、また機会もあるだろうと思っておったんだよ。そうしたらある日、久しぶりに電話があつてな」

『ご無沙汰しております。大和です』

「父さんの声は以前にくらべてか細く感じられた。しばらく互いの近況報告をしあったのち、父さんは思い切ったように、わしにこう言っただ」

『——ダム建設が少々ややこしいことになっておりまして、じつはそのことで博士にお願いがあります。私がお見せした計画書や図面に関しては、どうか内密にしてくださいみたいです』

『ふーむ、なんだか妙な話だな。まあ君がそうしてくれと言うなら口を閉ざすに吝かやんやんではないよ』

『ありがとうございます。それから誠に申し上げにくいのですが、私と会ったこともどうか——』

『内密なのかね。それはまた水くさいというか何というか……町で会ってもしらんぷりしろと?』

『本当にすみません……。いま大変微妙な局面に立たされております』

『……わかったよ。君の言うとおりにするよ』

「そんなやり取りがあつたんだが、それが父さんと話した最後だったかな。あまりな言い分だったのでわしも納得いかず、最後はぶつきらばうな応対をしてしまった。それが悔やまれる……」

それは、タケルと出会う少し前のことだったんだよ。タケルと初めて会ったとき、名前を聞き、顔を見て、すぐに息子さんだなと分かった。でも約束があつたんで、君の父さんを知ってるとは言えなかったんだよ」

博士の話はタケルを十分に驚かせた。博士はタケルの顔を見ずに言葉をつづけた。

「タケルの父さんはきつとダム建設を見直すよう会社に訴えたんだ。でもそれは会社やら計画を推し進める人々にとつてはマズいことだったろう。わしは父さんによけない話を吹き込んだヤツということで問題視され、上の人間から今後一切わしに会うな、関わるなと厳命されたんだと思う。父さんも会社の一員だし生活もあるからしかたがない、しよせんは一個の歯車……とがっかりして、その夜は大いにヤケ酒をくらったもんだ。

でも今は、それが間違いだったと思っっている」

モリアオガエルがポチャンと水に飛び込んだ。

「昨年、東京の学会に出かけたとき、偶然、昔の悪友と出くわしたんだ。いま何やってるんだと尋ねると国土交通省の地方整備局だつて言うんだよ。わしはふーんと気のない相づちを打つとつた。そしたら向こうから口を寄せてきて――」

『新出、おまえたしか米沢に住んでたな。この前ちよつと小耳にはさんだんだが、米沢から乗り込んで来た銀行員が、ひとりであちこちに掛け合つてゐる。着工寸前のダム建設にストップかけて再調査するよう説いてまわつてゐるらしいぞ』

「それを聞いた時、わしは息が止まるかと思つた。彼は――君の父さんはひとりで動いとつたんだ。それを知つて、わしはただもう頭の下がる思いでいっぱいになった。なんて男だと……。

それでもな、タケル。その話を聞いてもわしはまだ父さんに文句を言いたかつた。なんでわしと、米沢の山を知り尽くしているわしと縁を切つたのかと……。

その理由がわかつたのは、学会から帰つてきて二日後のことだつた」

タケルの心はざわざわと波立った。水辺で風にゆれる可憐な花のように。

「その日、タケルの父さんが逮捕されたニュースが流れた。クリスマス前のえらく寒い日だったな。わしはニュースを耳にしたとき、ようやく気がついたんだよ。父さんはわしを巻き込みたくなかったんだと」

タケルは思い出していた。その日、博士が言った言葉を。

『お父さんは誰も裏切つとらんぞ』。

あれから七ヶ月。ずっと閉めたままだった記憶のフタが突然こじ開けられた。これまで怖くて一度も振り返らなかった数々の出来事が、早回しの映画のように頭の中を流れていく。

しかし今のタケルには、その記憶にまったく別の方向から光が当てられたような気がした。博士の話に登場した父さんはやっぱりカッコ良かった。

「あつ」タケルはふいに叫んだ。

「新幹線の中でタンクつていう記者の人に会いました。

その人は事件のことを調べ直していて、父さんのことを
“濡れ衣” かもって」

「なんと……まだ追っかけてる人間がおったとは——でその記者は他に何と？」

「他に——波多野の——波多野のおじさんが——犯人——

「博士は眼をしばたたせて、空き缶を手を持ったまま、まるでデザートをむりやり口の中に突っ込まれたような顔で、タケルがしゃべった内容を必死に咀嚼そしゃくしていた。

「——ちよつと待った、タケル。波多野というと君の父さんの上司の波多野支店長か？」

「うん」

「いま県会議員候補で選挙運動の真っ最中の、あの波多野守か？」

「うん」

タケルはがくりとアゴを落とすように首肯した。

博士は意外な名前の出現に動揺していた。缶詰を置いた手で、両膝をせわしなくゴシゴシさすっている。

「そんな……しかし……いま待て、そのナントカいう記者は、えーっと理由、いや動機については

何と言うとった？」

「動機……」

「いや違う——」

博士はがばつと腰をあげると、湿原のほとりをあっちへ行ったりこっちへ行ったりとぐるぐる歩き回り始めた。

動機。銀行のお金を使い込み、賄賂を送った。

それはとりもなおさず、ダム建設をスムーズに進めるためじゃなかったか。波多野守がじっさいにそれを行つたのに、事が露見してじっさいに逮捕されたのはタケルの父さんだった――。

博士はヒゲを右手で激しく逆撫でながら、ぶつぶつとつぶやいている。タケルも不安になってきた。なんだから事件がそれだけで終わらないような気がしてきたのだ。

ポツリ。ポツリ。

湿原の水面に波紋が広がりはじめた。また雨が降り出したのだ。雲は来たときよりさらに低くたれ込め、強い風が森の向こうから吹きだした。

「タケル、行こうか」

ふたりは食べ終えた空き缶をビニール袋に入れ、そそくさと坂道を駆け上がった。

ケロケロと声がした。さつき見た蛙が雨に喜んでいるのだろうか。タケルは父さんが守ろうとした湿原に「また来るね」とお別れを告げた。

測候所の入口に着く頃にはもう本降りになっていた。遠くで稲妻がきらめき、雷鳴がとどろいた。やっと正午になろうという時刻なのに、この空の暗さはどうだ。ふたりは玄関のひさしの下まで疾走し、扉を開けて飛び込

んだ。

「おつかえりなさーい」

11

「おつかれさまー」

思いがけない嬌声に迎えられ、タケルと博士は仰天した。その声が互いに相手ではないことに気づいても、雨に濡れて肌に張り付いたフードを取り払うのに手こずり、ようやく取り払って研究室の異様な空気に気づいたときには、完全に手遅れだった。

博士は後頭部に激しい痛みを感じ、その場に膝を折って倒れた。

「博士！」

太い棍棒で博士を殴り倒したのはムネオだった。駆け寄ろうとしたタケルは太い腕で後ろから抱きすくめられた。

「ハーイ、あなたのお相手はアタイよ」

荒い鼻息を寄せてくる顔は忘れもしないサユリだ。彼らふたりは扉の脇に身を隠し、タケルたちが入ってくるのを待ち伏せていたのだった。

「会いたかったぜ、コノヤロー」

最初にした耳障りな嬌声の主はキョウスケだった。彼

は足を放り出した格好で椅子にかけ、正面からふたりを睨みつけていた。

サユリの両腕がアナコンダのようにタケルの体を締め上げる。ムネオの時のように逃げるのは不可能だった。

博士は倒れたまま、うめき声をあげた。ムネオはポケットから手錠を取り出すと、すばやく背後から博士の両手に掛け、

「この野郎！ 着ぐるみなんかでオレたちをダマしやがって、これでもくらえ！」

博士の胸を力まかせに蹴り上げた。転がった博士は頭を壁に打ち付け、激しく咳き込んだ。キヨウスケはやら椅子から立ち上がり、

「おいおい、痛めつけすぎて気絶でもされちゃあ、時間が無駄になるぞ」

「おう、そうだな」

「早いとこ、お宝のありかを聞き出すべし、だ」

キヨウスケは博士の頭元に腰をかがめ、博士の髪の毛を手荒につかみ、顔を引き上げた。

「こら、おっさん聞こえるか？」

「……おまえら、なにしにきた」

博士の後頭部から床に血がしたたり落ちている。タケルは身動きできないまま、ただ見つめているしかなかった。

「氣ばるねえ、おっさん。オレたちをナメたのが運の尽き、バッド・エイリアンズの人脈と情報網をバカにしちやいけませんってーの。」

ここをアンタが借りてるって聞いてから、仲間がずーっと見張ってたんだよ。知らなかった？」

12

「仲間が昨日から、いつおまえらが現れるかと待ち構えてたってわけだ。そしたらさっきこいつに連絡があつたんで――」

キヨウスケが胸ポケットから取り出して見せたのは高性能トランシーバーらしい。

「押っ取り刀で馳せ参じたってわけよ。オフロードバイクはこんなとき便利だぜ。一番近い道路からここまで、わずか五分だ」

口元を歪めながらそう言うと、博士の顔を床に押しつけ、ざらざらの床面に擦りつけた。

「オレたちから逃げようなんて、どだい無理な話さ。その辺の暴走族とは違うんでな」

後ろに控えていたムネオが、博士を踏みつけながら、猫背の上に乗った顔をタケルに向けた。

「こらがキい。おまえの搜索依頼が来てたぜえ」

えっ。タケルは驚いた。どうして知ってる？

「署のほうじゃ、このおっさんがおまえを誘拐して逃げてるって話も出てるがなあ」

何のこと？ タケルの頭は混乱した。

万全の装備で博士をしつこく追い回し――。

警察の中の情報さえ知っている――。

彼らはいったい――。

「……おまえたち、ただの高校生じゃないな」

博士が苦しい息の下で眼を光らせた。

「ふ、ははははは」

キョウスケは大声で笑い出した。そして立ち上がると椅子にどつかと座り直した。

「録音テープはどこにある？」

窓から、空を走る閃光が見えた。つづいてガラガラガラという音。雷雲が近づいている。

「……なんのことだ」

「おっさん、オレたちはこう見えても忙しいんだ。しらばつくれずに出せよ。おっさんが森ン中でたいそうなアンテナ片手に録音した、鳥の声のテープだよ」

「……あれはただの実験データだ。おまえたちも鳥の着ぐるみを着て実験に参加したいのか？」

「バカヤロー!!」

ムネオが博士の脇腹を靴のかかとで蹴った。

「ゲホッ、ゲホッ」

「減らず口たたいてると、鶏肉みたいに火あぶりにするぜえ！」

博士は体を丸めながら、体をムネオに向けた。

「……そうやってお宝を持って帰ったら、おまえが怖くて怖くてしょうがない父上が、頭ナデナデしてくれるってか？」

「な——なんだとお!!」

ムネオは怒りを炸裂させた。

13

「さしずめ手錠も、パパ、貸してよーって、おねだりしたんだろ？」

「てめー!!」

ムネオは容赦なく博士に蹴りを浴びせた。博士が不敵な笑みを消さないで、胸ぐらをつかんで引き起こし、さらに数発のパンチを見舞った。

タケルは止めてくれと叫ぶしか為す術がなかった。涙が止めどなくあふれ出る。このままでは博士が死んでしまう。

「オオオオオレの親父はなあ！ おまえなんかより偉いんだぞ！ 警察署長だぞ！ おまえずっと前に親父に

恥かかせたろ。だからオレは警察に代わっておまえに罰を与えてやるんだ。おまえを捕まえてキョウスケの親父さんの声の入ったテープを奪ってきたら、新しいバイク買ってくれるんだぞ。すげーだろ！」

ムネオは涙を流し、よだれを垂らし、ますます見るに耐えなくなってきた。業を煮やしたキョウスケが「やめろ！」と一喝すると、ようやくムネオは我に返り、床にペタンと腰を落とした。博士は鼻血でヒゲを真っ赤に染め、肩で息をしている。しかし鋭い眼はまるでこの状況を楽しんでいるかのように笑っていた。逆にムネオのほうが殴り疲れたという体だ。

タケルは、どうして博士は火に油を注ぐようなことばかり口にするのかと訝^{いぶか}しんでいたが、ようやく分かった。これが相手を怒らせて本音を引き出すということなのだ。現にムネオは不思議なことを言った。キョウスケの父親の声が録音されたテープと。キョウスケの父親は波多野守だ。博士と波多野。どこでどう結びつく？

そのとき、タケルの頭上から野太い声が割り込んだ。

「ねえ、何のことよテープって。それにアンタたちのお父様がどうして出てくるのよ」

サユリの言葉は依然としてやわらかいものの、不振の色が含まれており、タケルを小脇に抱えなおして一歩前に出た。

「いいアジトができるから、その博士さんを捕まえて遠くにうつちやろうっていう、話はそれだけじゃなかったの？」

「——つたく、ムネオにかかっちゃ段取りも何もあつたもんじゃないぜ」

キヨウスケは苦笑しながらも、開き直ったように伸びをした。

「サユリ、オレたちの目的はおまえの言つたとおりだ。間違いないじゃねえ。ただ少し裏があるのよ」

「何よ、裏つて」

14

「まあオレの話を聞け」

キヨウスケは間合いを詰めてくるサユリの機嫌をとるように表情を和らげてみせ、大げさに両手を広げながら話をつづけた。

「バッド・エイリアンズの合い言葉はなんだ？」

「“オレたちは誰にも頼らねえ”でしょ。だから——」

「そうだ。オレたちは何ものからも自由である、それがオレたちの基本精神だ」

「アンタが最初にバッド・エイリアンズを作ったとき、オレは親父とは絶交してる。オレは一族とも関係ないし、

波多野御殿なんてクソくらえって言ったわね。アタイはそんなアンタに惚れて付いてきたのよ」

キヨウスケは苦笑いを隠すように立ち上がり、雨粒が激しく洗う窓際に歩み寄った。

「オレはなにも変わっちゃいないさ。自由が一番、誰にも頼らず、おもねらず、頭を下げず、だ」

「じゃあ、どうして――」

「だから聞けつつってるだろうが！」

突然、キヨウスケは激した。だが得策ではないと考えを改めたのか、ふふふ、と取って付けたように笑い、壁にもたれて話し始めた。

「そもそもこの話は、親父のほうから持ってきた。つまり頼られたのはオレのほうなんだ」

キヨウスケは苦いものを噛んだような顔をした。

「おまえが抱えてるそのガキ、そいつの親父つてのがとんでもないバカで、オレの親父の部下のくせして、県をあげて進めていたダム建設に反対しやがったんだ。最初はたったひとりで何ができるもんかとみんなタ力をくくってたんだが、驚いたことに国のお偉方が見直す方向で検討しはじめたんだ。ものに動じたところなんか見せたことのないうちの親父が腰を抜かすほど仰天したのさ。もちろんオレはそんなこと、知ったこっちゃないから、フフンと鼻で笑ってたんだぜ。でもまあ親父にすりゃ

沽券こけんに関わることで、大変だったらしい。それでも昨年末にそのガキの親父が逮捕されてからは、追い風に乗って評判も挽回するわ、銀行を息のかかった連中にまかせて、おのれは議員に立候補するわで、一気に世論を味方につけはじめ、まあ前途洋々ってな具合だったわけだ」

キヨウスケは一拍おいて聞く者たちを見回した。長広舌が堂に入ってるのは、父親譲りか。

「何度も言うが、オレにとっちゃ何の関係もない話だ。小さい頃から鬼っ子扱いのオレは家にいることもあんましなかったし、親父とは何年もまともに口を利いてなかった。ところがある日――」

15

みんながそれぞれの思惑を胸に、キヨウスケの話を聞いていた。タケルも謎が明かされつつあることを直感し、固唾を飲んで耳を傾けていた。

「その親父が泣きついてきやがったんだよ。たまたま家に寄ったときだ。親父の奴がオレの部屋に足を踏み入れたのは何年ぶりだか。それでこう言うのよ、『わたしを助けてくれ』だって。笑っちゃまったよ実際の話。いつも小言しか言わない口が、助けてくれ、だぜ。聞くつもりはなかったが向こうが勝手にしゃべり出しやがった。」

『ダム建設工事に関する詳細なやりとりを、新出という研究者に立ち聞きされ、悪いことに録音までされてしまった。そこには工事に関わる重要な機密事項が含まれていて、公表されると工事がまた何年も先延ばしになる恐れがある。これ以上、計画が遅れると銀行も多大な損害を被ることになるんだ。かと言って正面から求めても、あの偏屈研究者のことだから、どういう態度に出るか分からない。すまないがおまえの力でなんとか奪い返してはくれないか』

そう頼んできたわけよ」

一気呵成にしゃべると、肩をそびやかして天井を仰いだ。あくまで超然とした態度を崩さない。

「オレはそれでも耳を貸すつもりはなかった。銀行が潰れるならそれも面白えってなもんでな。

ところが親父の奴、こう付け加えやがった。

『ダムが完成すると、その横を山に沿ってドライブウェイができる。バイクでツーリングするには絶好のワインディングロードだ』

さすがにバイク好きとしては聞き捨てならねえじゃねえか。さらに奴はこう言うのよ。

『近々、暴走族の一斉取り締まりが行われる。今度はかなり厳しいらしい。ムネオ君の父君とは昵懇の間柄だから、情報は逐一おまえに流すことができる』

そこでオレは考えた。これは権力におもねるのとは違う。あくまで“取り引き”だ、とな」

キヨウスケは最後の台詞に、特に力を込めた。

「それでアンタは乗ったの？」

あくまでサユリは問いつめる。

「そうだ。使えるものは使わないとな」

「研究所を襲撃した夜、研究所の中を手当たり次第にひっくり返していたのは、問題のテープを探していたのね——。じゃあどうしてアタイにうち明けてくれなかったの？」

「よけいな誤解をさせたくなかったんだよ」

すまん、と眉根を寄せて頭を下げるキヨウスケの仕草は、どこまでも芝居じみていた。

16

「ふふふふふ」

また博士の含み笑いがした。聞きとがめたムネオがすかさず睨みつけるが、いくら痛めつけても笑いを絶やさない博士が不気味らしく、腰が引けている。その姿は猿人ムネオにそっくりだ。

「……おまえたちは、親父さんらの使いつ走り^{パシ}に成り下がったってわけだ」

ヤカマシーと怒鳴ったムネオが棍棒で博士の腹部を突き上げた。

「やめとけ！ そいつはワザとオレたちを怒らせようとしてるんだ。まだ分らないのか!？」

キヨウスケは近寄って棍棒を取り上げた。ムネオは何だよおと不平を言いながらも猫背をさらに曲げて、苦しげにうなる博士の顔に唾を吐きかけた。

話の詳細を知らされていなかったサユリといい、彼らは決して一枚岩ではなさそうだ。タケルがそう思っていると、自分を抱えていたサユリの腕が疲れてきたらしい、タケルを床に降ろした。それでもタケルの両手はつかまされたままだ。

今度はキヨウスケが博士のそばにかがみ込んだ。

「なあ、あんた。こうなったら素直に出してくれよ。これ以上手荒な真似はしたくねえんだ。オレたちは単なるライダーだ。乱暴は好きじゃねえ。」

あんたの研究所にあった録音物は全部押収させてもらったぜ。カセットテープ、CD-R、MD。DATなんてのもあったな。中身をチェックした奴の話じゃ、鳥やら獣やらの声ばかりというじゃないか。何が楽しくてあんなことやってんだい、バカでかいアンテナ持ち歩いてさ」

「……アンテナじゃない。集音マイクだ」

博士は苦しい息の下で反論した。

「どっちだっていいやね。あんたは一週間前の昼、それ持って山の中にいたんだってな。思い出してみな、あんたはその時、木の陰にアンテ——集音マイクとやらを設置して、離れてメシでも食ってたらしいな。そうとは知らずに親父の奴ア、マイクの下で密談してたんだってよ。ちようど建設予定地を見回ってた最中だ。あんたが爪楊枝を使いながら戻ってきたのを見てビツクリしたらしい。あんたは何ごともなかったようにマイクとレコーダーを持って引き上げてった。

どうだ、思い出したかい。その時に録音したブツが欲しい、それだけだ。さあ出せ!!」

「出しなア!!」

キヨウスケの背後からムネオが追従した。

博士は赤黒く汚れたヒゲの下で口を開いた。

「……それで、いくらもらえるんだ？」

17

「あん？」

ムネオがアゴをしゃくって妙な声を出した。

「なに言ってるんだ、野郎——」

「この仕事の見返りは、いくらなんだい？」

その瞬間、部屋の空気は凍り付いた。

キヨウスケは息を飲んで博士を睨んでいる。

ムネオはポカンと口を開けたまま、博士とキヨウスケを交互に見ている。

サユリはタケルを掴んでいる腕を、わずかに締めた。

タケルは博士がまた殴られるんじゃないかと気が気ではなかった。

当の博士は——額に垂れたぼさぼさの髪の間からキヨウスケだけを見上げていた。

「こっちの猫背のあんちゃんは、テープを持ってきたら警察署長の父親が新しいバイクを買ってくれると言っておった。ちゃんと御褒美つまり見返りをもらうわけだ。

——ならばボスのおまえも何かもらう約束をしとるんだろ？ ん？」

また雷鳴がとどろいた。かなり近い。

雷鳴がおさまると聞こえるのは雨音と雨音が窓を叩く音、地下の発電機のブーンという音だけだ。

キヨウスケはと見ると、さっきまでの芝居がかった表情は失せ、目が完全に泳いでいる。

博士の指摘は凶星だったようだ。

サユリの手がタケルから離れた。それに気づくと、タケルは一足飛びに博士の足元まで駆けつけた。それをきつか

けに、部屋の空気がようやく動いた。

「そうよ！　確かにムネオは自分の口でさつきそう言ってたわ。本当なのね、ムネオ！」

サユリが大声を張り上げてムネオに詰め寄る。ムネオはただウーと唸るだけだ。

サユリはキヨウスケに顔の向きを変えた。

「キヨウスケ！　どうなのアンタ！　アタイはそんなの信じたくないわ。それじゃバッド・エイリアンズの問題はどうなるのよ！」

……くつくつくつく。

引きつっていたキヨウスケの口から笑い声が漏れた。

まだこの上どんな演説をしようというのか。タケルは博士に身を寄せながら固唾を飲んだ。

キヨウスケは口を開く代わりに、手をライダースーツの尻ポケットに突っ込んだ。そして引き抜いたのは……黒光りする銃だった。

あつと声を発したのは四人のうち誰だったか。

キヨウスケは笑みを浮かべたまま、銃口をゆっくりとあげた。

「ドラマごっこはおしまいだ」

「アンタ、何やってるか分かってるの？ そんなモン出したらもう、ライダーでも暴走族でもなく、悪党よ！」

「うるせえ、黙ってる！」

キヨウスケは銃をあげたまま近寄ってくる。そして博士の眼の前に立つと、銃口の先を博士ではなく、タケルに向けた。

「……なにをする、その子は関係ない」

「うるせえってばよ、おっさん！ おかげで段取りがメチャメチャだ。つまらんことでオレたちを仲違いさせようってつもりだろうが、ここまでだ。子供の命が惜しかったら、テープの在処^{あrika}を白状しな！ 研究所にはなかったんだから、この建物のどこかに隠してあるんだろ！ ああ!？」

タケルは向けられた銃口から眼を離すことができない。しかしその銃口は上下左右にふらふらと揺れていた。

「やめなさいったら！ そんなので怪我でもさせたら、アンタ本当に警察行きよ」

「ふっ。したらムネオの親父にまた頼めばいいのよ、なあ、ムネオ。このガキを撃って、おっさんの指紋を付けとけば、犯人はこのおっさんだ。」

おっさんにも後で一発お見舞いすりゃあ、子供を殺して、後追い自殺ってなストーリーもできる。どうだ、いい考えだろ？」

すでにキョウスケの眼は狂気をはらんでいた。

「そんなにうまくいくわけないでしょ！」

「いくんだよそれが。現にこのガキの親父だって無実の罪をおつかぶされて投獄されたんだからな。ダムが完成するまでおとなしく留置されてれば良かったんだが、まさか死んでしまうとはなあ。うちの親父も予想してなかったらしいぜ」

タケルは脳天に雷が落ちたような衝撃を受けた。やはり父は無実だったのだ。

「おーっと、タケルくんだっけ。喜ぶなよ。親父さんが無実だっつう証拠はどこにもないんだからな。ははははは」

ひきつれた笑い声が、よけいに恐怖をそそる。

「ま、待ちなさいよ、キョウスケ。アンタまだアタイの質問に答えてないわよ。本当に見返りを要求したの!？」

それに答えたのは博士だった。

「彼の態度を見ればわかるじゃないか。父親からたんまりとご褒美をいただいとるわい」

吐き捨てるように言い放った博士の言葉に、とうとうキョウスケは堪忍袋の緒を切った。

「もうゴタクは聞き飽きた！ おまえから先に、オレの銃の餌食にしてやる!!」

そのとき、眼を疑うようなことが起こった。

サユリが、キヨウスケと博士の間に割って入ったのだ。さすがにキヨウスケもぎよつとしたらしい。

「ど——どけよ、サユリ！」

「キヨウスケ……アンタ間違ってる。アタイたちがチームを組んだ頃、よく話し合ってたじゃない。権力に頭を下げたり、小金を稼ぐためにやりたくないことなんてしたくない、オレたちはオレたちのしたいことをしたいようにするためにチームを組んだんだと。だから貧乏でもいい。必死にバイトやってバイク買って、行きたいところをどこまでも突っ走って行こうぜって……。」

いいえ、お金のことは別にしても、どうして銃を使ったりするの？ どこから仕入れたか知らないけど、それも一種の権力じゃない？

この人の研究所に乗り込んだのだって、何か悪いことを企んでるからオレたちが天誅を下す……アンタがそう言うもんだから、鵜呑みにして付いてきたけど、それも怪しいみたいね。

以前のアンタはそんな人じゃなかった。アタイたちの憧れのリーダーだったのよ。だからお願い、冷静になつて、もう一度考え直してみて！」

タケルは眩しいものを見るような目でサユリを眺めた。まるで猿人サユリが夢の中から飛び出してきたみたいに見える。

ダーンッ。

銃口が火を噴き、銃弾は天井にめり込んだ。

「——サユリ、おめえ甘えんだよ。オレたちは高校生だが、すぐに社会と向き合わなきゃいけない年齢だ。そうになったら夢だの可能性だのって言ってられねえんだぜ。あくせくバイトに精出してこの先もずっと生きてくつもりか？ 夢を見てる暇もありやしねえんだぜ。

考えてもみな。たいして出もしねえ油田の脇で、噴水みたいにジャンジャン油が湧き出したとしたら。しないで済む苦労なら、しないに限る。

さつきも言ったじゃねえか、使えるものは使わないとな。——大人になれ、サユリ」

しかしサユリは微動だにしない。

「大人が聞いて呆れるわよ。アンタ、銃を持った手が震えてるじゃないの。顔色も悪いし。どだい無理なのよ、こんな強盗みたいな真似。

——ねえ、もうやめにしましょ」

その言葉が終わるか終わらないうちに、ゴンツと鈍い音がした。頭を押さえてサユリが片膝を付いた。ムネオがこっそりサユリに近づき、棍棒を振り下ろしたのだ。

ムネオの抜け目のなさ、油断のならなさは絶品だ。

キヨウスケが取り上げてテーブルの下に転がしておいた棍棒をいつの間にやら手中に取り戻していたのだ。おそらく彼はチームの中でもそんな役回りを得意としているのだろう。そして味方さえも躊躇なく屠る……。タケルは呆れかえるというより、テレビのヒーローものに登場する悪者とは異質の陰湿さに戦慄を覚えた。

サユリは脳震盪を起こしたらしく、頭を両手で抱え込んだまま床に伸びてしまった。

キヨウスケがほくそ笑んでいる。

「よし。そのロープで後ろ手に縛っちまえ」

手錠はひとつしかなかったのだろう。テーブルには博士の荷物がひっくり返されている。中身を調べられたのだ。その中に持ってきたロープがあり、キヨウスケはそれを手の拳銃で指し示した。

一瞬の隙があった。

博士は両肩で壁を押し、バネ仕掛けのように立ち上がると、何かをキヨウスケ目がけて投げた。

キラッと銀色に光って見えた物は、狙いを誤らず、キヨウスケの眉間を直撃した。

それは博士にはめられていた手錠だった。

キヨウスケは完全に不意を突かれた。

額を押さえて体勢を崩したキヨウスケに、博士は間髪入れず飛びかかった。ふたりはもつれるようにして倒れ、それでも博士の狙いは最初から銃にあっただらしく、すぐさま手刀でキヨウスケの右手首を払った。銃はゴトンという重たい音をたてて床に落ち、それを博士は左足で蹴り飛ばした。銃はざらつく床面をゴリゴリといやな音を立てて滑り、壁際の棚の下に吸い込まれた。

「イデデデデ」

後ろ向きに首筋に乗っかった博士によって、キヨウスケの両手は鳥の羽のようにねじ上げられていた。ここまでの動きはわずか五秒。博士のまるで計算されたような動きにタケルは驚嘆した。

「タケル、ロープ！」

弾かれたようにタケルはテーブルのロープに飛びつき、そのままテーブルの上を転がって博士のそばに着地した。博士は受け取ったロープを片手で広げ、キヨウスケの両手首をぐるぐると縛り上げる。その間も博士の目は、テーブルの向こう側で棒立ちになっているムネオから逸らさない。

「傭兵学校で鍛えられたわしに敵うわけなからうが！」
耳をつんざく博士の大声に、ムネオは尻餅をついた。

そのまま後ずさりして扉を開くと、後も見ずに、雨の中をあたふたと逃げていった。

21

タケルは言われる前に扉に駆け寄り、内鍵を掛けた。振り返るとテーブルの足元にサユリが倒れたままだ。怪我の具合はどうなのだろう。

「タケル、荷物をまとめてくれ」

キョウスケの両足を縛りながら博士が呼んだ。タケルはサユリを気にしつつ、散乱している博士と自分の荷物をそれぞれの鞆に放り込み始めた。

「てめえ！ このままで済むと思うな」

身動きもならず、床の上に放り出されたキョウスケは、それでも強がり止めない。博士はそれを無視してタケルのそばに来た。

「……ねえ博士」

「ん？」

「どうやって手錠をはずしたの？」

「あれか——。指の関節をはずしたんだよ」

「そんなことができるの!？」

「ああ、基本中の基本だ。もつとも、はずしてる動作が敵にバレないように注意しないといかんが。こいつらを

怒らせて、殴ったり蹴ったりさせながら、裏でこつそりやっとな。まあ奴らの本音も聞き出せたし、一石二鳥だわな。はっはっは」

「いったい何の基本なのか？ 今日博士の見たことのない面ばかり、遭遇している。」

「……ヨウヘイってナニ？」

「お金もらって戦場で働くプロの兵隊のことだ」

「博士はその学校で関節はずしも学んだの？」

「ははは、ウソだよ。わしはそんなところ行ったりしとらん」

博士は笑い飛ばすが、若い頃は世界中を放浪した猛者だ。タケルには信用できない。

「ちよつと待っててくれ」

博士は地下室へ下りていった。やがて発電機の音は切れ、部屋の蛍光灯も消えた。階段を上ってきた博士は数個のDATテープを持っていた。博士は黙ってウインクした。タケルも合点した。なるほど食料棚にいっしょに置いてあったわけだ。

「奴らはこんなものに血眼になつとなとは……。わしもまだ聴いとらんが、ひよつとすると貴重な証拠物件になるかも知れんな」

そうつぶやくと自分の鞆にポイと投げ込んだ。

「さて、ここからどうやって逃げるか……。おそらく

さつき逃げた奴は、付近に隠れて見張っていた手下どもを集めて、また襲撃して来よう」

博士は屈んで棚の下から銃を拾い上げた。そして慣れた手付きで銃倉をはずすと、銃弾をすべて鞆の中に落とした。

タケルが窓ガラスに掛けられた金網越しに外を見ると、数人の黒い影が横切るのが見えた。

22

「様子をうかがっておるのかな。電気を消して良かったよ」

博士がタケルの頭越しに外を見て言った。そして踵きびすを返そうとしたとき、ツツツと顔をしかめた。

「大丈夫ですか」

「ああ、大したことはない。昔はあれぐらい暴行を受けても平気で相手してたんだけどな」

しかし胸の辺りをさすつているところを見ると骨にヒビぐらい入っているのかも知れない。服装は整え直したものの、あちこちが裂けているし、血がこびり付いている。そのまま町に出たら間違いなく不審人物の扱いを受けるだろう。

「さあ、リュックを背負いなさい。こうなったら正面か

ら一点突破だ」

ふたりは扉に向かおうとしたが、そこで足を止めた。なぜなら気絶していたはずのサユリがむっくりと体を起こしていたから。

サユリが鋭い視線をよこす。博士は身構えた。しかしふたりの間にタケルが手を差し出した。

「待って」

タケルはとことことテーブルを回ってサユリに近づいた。

「お、おい、タケル」

タケルはサユリの真正面から、その鼻毛が覗き込めるほどの距離まで近寄った。そのときまた稲妻が光り、サユリのむくつけき容貌や、凹凸の激しい筋肉の固まりである手足を真横から浮き上がらせた。泣く子も黙るどころか、泣いたことのない子でも悲鳴を上げそうな姿である。

タケルはそこで、深々とお辞儀をした。

「サユリさんありがとう。さつきは博士を助けてくださって」

サユリの眼は大きく見開かれた。

「あなたは悪い人じゃありません。ぼくにはそれがよく分かります。いいえ——」

そこでタケルは言い淀んだ。しかし思い切って話をつ

づけた。

「いいえ、ぼくはあなたがいい人だってことを以前から、昔から知っています。

——あなたはお忘れだと思いますが、ぼくとあなたは、はるか大昔に出会っているのです。その時もあなたはぼくを助けてくれたし、ぼくも少しはあなたの役に立ったと思います。

——これから博士とぼくは、この建物を出て逃げます。外にはぼくたちを捕まえようと待ち構えている人たちがいます。どうかお願いします。ぼくたちを助けてください」

タケルは再び、ぺこりと頭を下げた。

23

博士は呆氣にとられていた。

タケルが自分を制してサユリの前に進み出たことでも十分仰天していたが、彼の口から出た言葉には驚きを通り越して、不安になった。

タケルは優秀な子である。知的好奇心という面では早熟と言ってもいい。彼が研究所に遊びに来るたびに温かく迎えていたのは決して子供が好きだからじゃない。いや反対に自分はそれほど子供が好きじゃなかった。この

年齢まで独身で通したのは、良い出会いがなかったこと以上に、家族を持つには、自分の性格があまりにも社会性に乏しいことを自覚していたからである。他人と日常的な交渉を保ちつつ研究活動をつづけるなんて想像すらできない。もちろん大学時代の友人たちがつぎつぎと結婚して、それでもちゃんと研究成果をあげるのを見るたびに驚嘆したものだ。自分にできることではない。だから自分は生涯孤独でいい、いや孤独でいるべきだと断じ、女性や子供という存在を拒んできたのだ。

——ところがタケルは違った。人付き合いが苦手で無愛想な自分の懷に、苦もなく飛び込んできたのだ。逆にそれを笑顔で迎え入れた自分自身にも信じられない思いがしたものだ。

いまでも覚えている。タケルが初めて研究所にやってきた日の夜、それまで経験したこともない興奮が自分の体を占領し、朝まで眠れなかったことを。それはタケルが自分と親交のあった大和武彦のひとり息子であるからでは決していない。あの子自身の持つ価値が自分とシンクロしたのだ。そうとでも考えないと納得できない。

タケルの科学に対する興味、探求心は素晴らしかった。あの年頃にしては質問の的を射ていることに驚かされつつ、まるで自分の分身ができたような嬉しさを感じたことは確かだ。その時から、タケルと話すことが日々の楽

しみになった。彼の成長を促すことに喜びを感じ、彼がいてくれることが自分に良い刺激を与えた。その彼と出会って丸一年。ひいき目に見ても、今のタケルは中学生ほどの知能を持っているだろう。一時は父親の死が彼にどんな影響を及ぼすか大いに心配した。不謹慎な言い方だが、母親が倒れたことで彼のバランスは保たれたのだと思う。

いま、タケルはまったくの徒手空拳でサユリの前に体を晒さらしている。サユリが太い腕を一振りすれば壁に叩きつけられるであろう間合いで。しかも「大昔に出会った」と言い放った。あの夢のことを言っているのか？タケルは正気なのか？

タケルの夢と現実の区別がついているのか？

24

サユリは狐につままれた面持ちでタケルを見た。

殴られた頭はまだじんじんと痛むし、昏倒した時に打ちつけた額はうっすらと血が滲んでいる。頭の中もまだ夢うつつの気分。

そんな焦点の定まらないアタイの眼の前に、この子、タケルくんがいきなり「ありがとう」と礼を述べてきた。どういうわけ？

でも「ありがとう」ってすてきな響きね。考えてみれば長いこと耳にしてないし、口にしたこともない。だいいち子供の笑顔をこんな間近で見るのって久々。そう、^{いとこ}従兄のカオルを除いて――。

アタイの言葉遣いを聞いて、たいていの人は、お姉さんばかりの家の末っ子なんだろうと訊く。残念、違いわ。アタイはひとりっ子だったの。

アタイはごく普通の中流家庭に生まれ、普通の環境で育った普通の男の子。でも普通じゃなかったのは、この顔と体格。アタイを見た子供はたいてい表情を強張らせ、なかには泣きじゃくる子もいる始末。あやそうとしたら一一〇番通報した親もいたわね……。

そんなアタイも生まれたときは無類に可愛かったらしい。あんまり可愛いので両親がファンだった吉永小百合にあやかっけて命名されてしまった。

ひとりっ子だったこともあって、アタイは蝶よ花よと大切に育てられた。小百合の映画をよく観せられて、アタイも自分がこんな綺麗な存在なんだと信じて疑わなかった。家の中に鏡が一枚もないことを不思議と思わずに。

幼稚園に上がって初めて同い年齢の子らといっしょになったとき、ようやく真相を知った。誰もアタイに近寄

らないし、先生でさえ引きつった笑顔。そこで初めて鏡というものを見たんだった。映ったのは吉永小百合じゃなかった。今でいうボブ・サップをもっと憎々しげにした顔つき、幼稚園児とは思えない体格。アタイは見たものを否定した。その日から一切、鏡を覗かなくなった。育つにつれ変貌していくアタイに、それでも両親は変わらず可愛がってくれた。当時のアタイにとって両親の愛は間違いなく一方の支えだった。

もうひとり支えてくれた人、それがカオル。

カオルはアタイより二つ年上の男の子。近所に住む裕福な親戚の子で、よくいっしょに遊んだわ。カオルはもう真正銘、掛け値なしの美少年だった。アタイは彼の顔を眺めてはポーツとしたものよ。切れ長の目、長い睫毛、ツンとしてカッコいい鼻。彼の母親は面白がつてよく女の子の服を着せていた。彼もわざと女言葉を使ったりしてたわ。

25

綺麗に着飾ったカオルが夢見るような眼をして、透きとおる歌声を聞かせてくれたりすると、もう天国にいる気分。アタイは彼にかす傳く忠実な天使。

いつしか、自分はカオルの弟だと思い込むようになって

ていた。カオルに似た容姿を持ち、カオルのような優美さで小首を傾げ、歩き、微笑む。言葉遣いもカオルの女言葉をそのまま真似た。でも恥ずかしい話、彼が盲目だと知ったのはずっと後になってからのこと。

カオルは学校に通わず、家庭教師に勉強を習っていた。彼とは互いの家以外で会うことはなかった。だからアタイにとってカオルは外界の汚れた世界とは無縁の美の化身として存在しつづけた。そのカオルが両親の仕事でアメリカに去ったときには、何日も泣いたものよ。

アタイは中学生になって、服装は男性の制服を着ていたものの、女言葉はすっかり定着していた。でもアタイを恐れて、誰も意見したり、からかったりしなかった。友達すらできないアタイは孤独だった。なぜなら仲睦まじかったはずの両親は小学六年の時に離婚し、アタイは当初父親に引き取られたものの、その父は女を作って失踪、母親は行方不明というありさまだった。

そんな時だった、カオルと再会したのは。

電話の向こうで元気なカオルの声が、日本に戻ってきたんだ、サユリに会いたいと言ってくれた。アメリカで眼の手術を受けて見えるようになったんだという。アタイはおめでとうと言い、彼の指定した待ち合わせ場所にすっ飛んで行った。それが夢の終わりになるとも知らずに。

久しぶりに見たカオルは見違えるほど立派な大人に変身していた。垂らした前髪の下には、子供の頃の美しさにプラスして妖艶さをたたえた顔があり、アタイはその瞬間、恋に落ちたと思った。

そしてカオルの眼の焦点がアタイの上で合ったとき、その恋が終わったことを知った。

カオルの顔に浮かんた、嗤いとも困惑ともつかない表情。アタイは呼びかけた後につづく言葉を飲み込むしかなかった。

酒やタバコに走ったのはそれから。町に出て誰彼かまわず喧嘩をふっかけては暴れる毎日だった。自宅の部屋にはたくさんの鏡を持ち込み、自分の姿が三百六十度どこからでも見られるようにした。どうすれば相手を怖がらせることができるのか、そればかり考えていた。服だって黒のジャンパー、黒のパンツ、黒のサングラスでキメた。そんなアタイがキョウスケと出会うのは時間の問題だった。

「おめえのような奴をさがしてたのよ」

キョウスケは出会ったばかりのアタイに対して、開口

一番そう言った。彼はありのままのアタイを認めてくれた最初の人だったわ。

同じ高校に通いながら、同じようにはみ出し者だったアタイと彼はすぐに意気投合し、ムネオらと共にバイクチームを立ち上げた。とはいえバイクを持ってなかったのはアタイだけで、アタイは毎日死にものぐるいでバイトしたっけ。力仕事ばかりだったけど、どこでも重宝がられて、わずか一ヶ月で念願のバイクを手に入れた。とはいえ免許を持ってなかったもので、取得できるまで夜の町はずれで乗り回して練習しまくったのが懐かしい。

アタイの中には、常に怒りが渦巻いていたわ。美しいものへの怒り。アタイをこんな姿に作り上げた神様への怒り、アタイのありのままを認めず、捨てていった両親への怒り。

町ですれ違ったハンサム男はすべて殴り倒した。安物の酒を浴びるほど飲んで化粧品店に行き、おもいつきりゲロを吐き散らしたこともある。とにかく、およそ美という観念が許せなかった。美があるから醜がある。美がなくなれば醜は消える。

アタイはこの世から美を排除しようと決心した。そんな気持ちに賛同してくれたのもキョウスケだった。

「美というのは、金の上に成り立ってるんだ。金を持

つ者こそが美術に親しみ、美食をたしなみ、あげくは自分のツラを整形したりする。そして美を独占するために権力を欲しがらる。いいか、美と金と権力は三位一体なんだ」

それからのアタイはキョウスケやムネオらと共にバイクで各地を駆けめぐり、夜も更けるまで議論し合い、楽しい日々を過ごした。本当の仲間を得たと思った。なのに――。

アタイはキョウスケに裏切られ、ムネオに殴り倒された……。アタイが仲間と信じてきたのは一体何だったの？ 何を信じたらいいの？

眼の前にいるタケルというこの子は――。

なぜこんな無防備にアタイに相對せるの？

なぜこんな無垢な眼をアタイに向けられるの？

アタイを「いい人」と断言した。何を根拠に？

そのうえ「大昔に出会った」？ 記憶にないわ、アタ

イには……記憶――何かしら、この感覚。

この子の眼の中に燃えるものが見える。

溶岩――いっしょに逃げた――洞穴を――。

ゆうべ夢で見たような――。あれは――。

すうつと前に伸びたのは、タケルの手。

ハッと身構えたのはサユリ。

——どうしてアタイがこんな子供にビクつかなきゃいけないの!?

しかし、サユリはタケルの眼に抗しがたい力を感じていた。

——でも、この子の言うように、本当にいつかどこかで会ったことがあるのかも知れないわ。

我知らず、サユリも腕を伸ばしてタケルの手を握ろうとした。

「おーい、サユリ」

夢を破ったのは、縛られて床に転がされたままのキョウスケだった。

「眼が覚めたのなら、こっち来て助けてくれよ。さつきは済まなかった、謝る。おまえの言うとおりオレは見返りを要求した。百万が手に入る予定なんだ。お前にも半分やるよ。五十万と五十万だ。なんならもつと親父を叩いてもいい。あと二十万は上乗せできると思うぜ——」

サユリはタケルに伸ばしかけた手を引っ込めた。そしてのっそりと部屋を横切ると、キョウスケの頭元に立ち、彼を見下ろした。

「よお、サユリ。早いとこ紐を解いてくれ」

まるで軽口を叩くような口調でしゃべるキョウスケを無視して、サユリはテーブルに手をやった。

「このタオル、もらってもいい？」

話しかけた相手は博士だった。

「ああ……」

博士は肯定とも呻き声とも判別のつかない返答をした。サユリの取り上げたタオルは、博士がここにたどり着くまで首に巻いていたものだ。雨と汗でひどく汚れている。サユリはそれを持つと、キョウスケの顔の上にかがみ込んだ。

「来てくれたなあ。これ解いて——ンンン」

サユリはタオルでキョウスケの口をふさぎ、頭の後ろで縛った。猿ぐつわだ。

「これで静かになった。さて次はあなたたちね」

わずかの間に博士はタケルの元に移動していた。

サユリは再び戦闘態勢を取る博士に取り合わず、扉に近づくとの外の気配に耳を澄ました。やがて片手でチョイチョイとタケルを呼んだ。タケルがサユリに近づいていくので、放っておけず博士も付いていく。

「外には十人ほどいるわ。アタイが彼らを中心に呼び込むから、頃合いを見はからって逃げなさい」

さらにサユリは付け加えた。

「ただし、ムネオには気をつけなさい。臆病者だけに武

器持つてるからね。奴はナイフの達人よ」

28

博士は無言でサユリに扉の鍵を渡した。サユリはウインクすると、言葉をかけようとするタケルにかまわず、扉を開けた。

雨は小降りになったものの、空は暗いままだ。

サユリは手びさしで雨を除けながら表に飛び出すと、喉が裂けんばかりの大声で、

「みんなー!! あいつらはやつつけたわよー!!

キョウスケが大変なのー!! 早く来てー!!」

そう叫びながら大きく手招きした。

博士とタケルは扉の脇のロッカーの陰に身を潜めた。タケルの心臓の鼓動が背中越しに博士に伝わってくる。こうなったら運を天に、じゃなくサユリにまかせて勝負するしかない。ふたりは腰を屈めて、いつでもダッシュできる体勢を整えた。

やがて連中がぞろぞろと集まってきたようだ。何人かがおそるおそる部屋の中を覗こうとしている。ふたりはさらに身を縮めた。

「みんな集まった? ちよつとこつちへ来てちようだい。キョウスケがね——」

サユリは言葉巧みに仲間を部屋の奥へ誘導していく。ぞろぞろと入ってきたのは、いかにも高校生といった感じの連中だ。中には一年生なのか幼い顔も見える。ずっと森のどこかに隠れていたせいで、レインコートの下もずぶ濡れだ。

サユリに従う連中の流れが切れたとき、博士が「今だ！」とささやいた。タケルはほとんど四つ足に近い状態で扉を抜けて表に出た。博士も後を追いつ、ふたりは同時に外壁に張り付いた。

そのまま抜き足差し足で壁を端っここまで進む。どうやら連中は全員中に入ったようだ。

「わしに付いて来なさい」

そう言う博士は脱兎のごとく駆けだした。もちろんタケルも付き従った。とにかく近くの藪に姿を隠さねば。タケルは怖くて後ろを振り返ることができなかった。いつ連中がだまされたことに気づくか。ここが運命の分かれ目だ。

ふとタケルはサユリの顔を思い浮かべた。

彼は無事にあの場を切り抜けられるだろうか。そこに思い至るとタケルの足に制動がかかった。

振り向けばちょうどサユリが後ろ向きにソロソロと出てくるところだった。そして静かに扉を閉めると急いで鍵を掛けた。

やった。閉じ込め作戦成功だ。

「博士！ うまくいったよ！」

ぼくは大声で叫んだ。博士も足を止めてこちらを振り返った。

と、博士がウツと声をあげて草むらの中に倒れた。背中にナイフが突き立っている。

29

ああーっ。

タケルの口から抑揚のない悲鳴がほとばしった。倒れた博士の背中に刺さったナイフは鈍い光を放ち、できたばかりの墓標のように屹立していた。

タケルは博士の元へと一散に駆けた。まるで宙を飛んでいるような気持ちでした。ここまでがんばってきたのに、これで博士がどうにかなったらいやだ。いやだ、いやだ!!

眼の隅で何かがきらめいた。と思う間もなく、タケルが足を滑らせるのと、頬を鋭いものが飛び過ぎるのが同時にあった。切り裂かれた^{みみたぶ}耳朵から赤いものがバツと飛び散った。

勢いのままタケルの体は草むらを転がり、木に激突して止まった。背中のリュックがクッションの役を果たし、

怪我はなかったが、眼と鼻の先の地面に突き刺さったナイフを見てゾツとした。

ムネオだ！　ムネオが自分たちを狙ってる！

タケルはあわてて立ち上がろうとした。しかし戦車のように草むらを蹴立ててきたサユリによって抱きかかえられ、再び地面を転がった。

「ダメよ！　立ち上がっちゃ奴の思うつぼよ！」

サユリは素早くあたりに眼を配った。

林の中はひっそりと静まりかえり、木々の葉がその奥を隠している。タケルは頭上に眼をやった。もし木の上から狙われたらひとたまりもない。

「大丈夫、奴は恐がり屋。木になんか登れない」

タケルの心配を言い当ててサユリは言い、タケルを抱えたまま、そばの大きな岩を背にして立て膝をついた。

博士の様子をうかがうと、背中に手を回して肩口のナイフを抜き取ろうとしている。命に別状はなさそうだ。

ひとまずホツとした瞬間、タケルの眼は、林の中にキラリと光ったものを見逃さなかった。

「あそこ！」

タケルが小声で叫ぶのとサユリが振り向いて、手にした石を投げるのとは、ほとんど時間差がなかった。

「ぐふあつ」

当たった！　サユリは岩を蹴って跳躍すると、林の中

に飛び込んでいった。しばらく格闘する音やムネオの怒号が聞こえていたが、やがて静まり、サユリがムネオを肩にかついで出てきた。

「タケルくん、アンタって眼がいいのね」

サユリはニヤリと笑うとムネオを地面におろし、腰のベルトを引き抜いて縛り上げた。

刃物を人間めがけて投げつけるなんて…あらためてタケルの背筋を冷たいものが走った。

30

タケルが駆け寄ると、博士は引き抜いたナイフを捨て、レインコートとトレーナー、そして血の付いたTシャツを脱いでいた。

出血は大したことはなかったが、ナイフが突き立ったぐらいだ、傷は浅くない。負傷箇所は左肩胛骨の下あたり。左腕を回そうと体をひねった博士の顔が苦痛にゆがんだ。

「大丈夫？」

訊ねたのはタケルではない、サユリだった。

「ああ……歩けないことはなさそうだ」

博士はTシャツを裂くと、傷口をカバーするように体に巻き付けて結んだ。タケルは博士の顔や首筋を流れ落

ちる脂汗が気になった。

「サユリくん……か。君にはまた助けられたな」

「あら——いいのよ」

ガチャーン。ガラスの激しく割れる音がした。測候所の窓だ。閉じこめられた連中がようやくだまされたことに気づいたのだろう、割って出てこようとしているのだ。しかし窓枠には金網が張つてあるため、すぐには出られない。しかし破られるのも時間の問題だ。

「さ、急ぐのよ」

サユリはふたりを促した。

「博士、立てる？」

タケルは博士の右側から肩を貸して、立ち上がるのを手助けした。

「す、すまん、なんとかいけそうだ」

博士はタケルに支えられてゆっくり歩き出した。

「ここでお別れね」

タケルは驚いて振り向いた。サユリはにっこりと手を振って測候所に向かっていく。

「サユリさん！」

「時間稼ぎするわ。できるだけ遠くに逃げなさい。ただし道路には絶対出ないこと。奴らはバイクだからすぐ見つかったちゃうからね。——また会いましょう！」

そう言い残すと、彼は振り向かずに駆けだした。

タケルくん。あなたと出会えて良かったわ。

あなたの体をナイフが掠め、血が飛び散った時、「痛い」と感じた。こんなに痛みを感じたことはなかった。すぐく息苦しかったわ。あなたのような可愛い少年が傷つくの、これまでのアタイなら狂喜した見てたはずなのに。

アタイはようやく気づいた。美しいか醜いかにこだわるのは結局同じこと。プラスとマイナスが違うだけ。要は、自分にとって大切かどうか。

タケルくん、アタイはあなたを守ってあげる！

31

ふたりが滑り降りたところは、昼食の時に訪れた、あの湿原だった。午後の激しい風雨によって水はさらに濁りを増していたが、蛙たちは耳が痛くなるほどの熱唱を繰り広げていた。

「タケル、耳から血が出てるじゃないか」

「平気です。さあ行きましょう」

博士は思わずタケルの顔をまじまじと見た。

湿原を迂回するにはかなりの時間を要した。

雨はほとんどあがって風も弱まってきた。

「この下には別の池があつてな。今朝話した蛭はそこに群棲しとるんだよ」

それは湿原の対岸の土手をさらに降り、小振りな丘をひとつ越えたところにあつた。

すでに夕暮れが近い。灰色の雲は依然低い空を覆っている。そんな中でタケルが目の当たりにした光景は筆舌に尽くせないものだった。

真っ先にタケルを魅了したのは滝だ。

ザーツという水音。満々とした水。周囲を取り囲む岩に生えた緑色の苔。鬱蒼と繁る森。そして激しい風雨を避けてか、森の深奥に光って見えるのはまぎれもなく蛭のそれだった。タケルは状況も忘れて、ワオ！と叫んだ。

「すごいところですね。こんなすてきな場所を誰も知らないなんて……。ますますダムなんかで潰したりしたら罰が――」

罰――を当てるのは天国の父さんだろうか。

「これは、マズい……」

博士のつぶやきにタケルは顔を上げた。

「傷が痛みますか？」

「いやそうじゃない。――すまんが池のたもとまで連れていってくれ」

ふたりはさらに草をかき分け、岩を越えして、なんと

か水際までたどり着いた。水面の大半は木の葉や折れた枝などで覆われている。普段なら森に囲まれた静かな水面は、きつと鏡のように、あたりの木々や空や滝の姿を映しているのだろう。まさに台風一過だ。

しかし博士の両眼は美しい光景を前にして、くわっと見開かれ、鬼のような形相をしている。

「この池はな、以前は半分ほどの大きさしかなかったんだ」

「えっ」

「台風はこの山形に、かつてないほどの雨をもたらした。その結果がこれだ」

博士は汗にまみれた顔をタケルに向けた。

「決壊寸前だ」

「決壊？」

32

タケルの脳裏によみがえったのは、猿人たちと共に渡った湖で、急流に飲まれた光景だった。

「見なさい、あちらを」

博士が指し示す方向。そこだけ池の端に森がなく、ぼつかりと空が見えている。

「あそこからも崩れ始めている」

言いかけた先から、ズズズという音が響き、数メートルの森が向こう側に倒れ、消えた。

「ここは危ない。急ごう」

「ハイッ」

ふたりはあわてて土手に取り付いた。しかし傷を負っている博士にはキツイらしく、思うように登ることができない。しかたなくふたりは池の縁を歩いて、登れる場所を探そうとした。

だが、すでに遅かった。

ガクンと地面が揺れたかと思うと、水面が突然動いた。同時にタケルと博士の足元がぱつくりと割れ、足を取られた。ああつと喚きながら眼にしたものは、倒れていく木々、砂で作った堤防のように崩れる土手、割れ目に流れ込む水、しまいにはすべての光景が横になり、回転し、ごちゃまぜになった。ふたりは奈落の底に落ちていった。

「……タ……ケ……ル」

眼を開けたタケルは激しく咳き込んだ。口の中が砂だらけだった。起きあがろうと手足に力を入れた時、初めて体が砂の中に埋まっていることに気がついた。

「……タ……ケ……ル」

かすれた声が呼んでいる。

「博士！ どこですか？」

タケルはもがいた。幸いかぶった砂の量は少なく、すぐに地表に出ることができた。怪我はしなかったようだ。

「……タ……ケ」

博士の姿は十メートルほど離れた場所にあつた。周囲には大きな岩がごろごろと転がっている。

「は、博士！」

にじり寄るタケルの眼に映つたのは、息も絶え絶えに横たわる博士の姿だった。

「タケル……よかった、無事で……」

「起きられますか？」

「……いや……肋骨が何本かイカれたようだ。足も動か
せん……」

「そ、そんな——」

「タケル……聞きなさい、ここからは……ひとりで行く
んだ……そして……町の人間に伝えるんだ……一刻も早
く……避難するよう……」

33

博士の怪我は見た目以上に酷いようだ。しゃべるのも
つらそうで、しきりに顔をしかめている。タケルと同様
に口や喉に砂が飛び込んで、やたらと咳き込んでしまい、
そのたびにウツと体を引きつらせる。重傷なのだ。タケ

ルは博士の話よりそちらのほうが気になってしかたがなかった。

「ダメです、博士。しゃべらないで！」

しかし博士は腕を伸ばし、タケルの肩に指を食い込ませると、激しく揺さぶった。

「……事は急を要するんだ。この土砂崩れが、山一帯で起こる……町の東側が泥流に飲み込まれる可能性がある……」

「でも——でも——」

博士の凝視に堪えられずタケルは眼をつぶった。

「ぼくみたいな子供の話なんか、誰も聞いてくれないよ。……ぼくの話なんか——」

タケルの言わんとすることは分かる。昨年暮れ、父親が逮捕されたときの人々の反応。マスコミが大いに煽ったとはいえ、その過剰な報道に同じ町に住む人々が易々と乗り、露骨なバッシングに出たのには、妬みや嫉みが絡んでいなかったとは言いがたい。米沢のベッドタウンとしてかなり開けたとはいえ、まだまだ旧態依然とした村社会の名残りが存在する地域だ。一概にそれが悪いとはいえないが、あのときは凶の目に出てしまった。

当時、あの事件に疑問を呈する者はほとんどいなかった。だからこそ、タケルは自分の非力を痛いほど感じていたのだ。

しかし――。

「タケル。蛍の棲んでいたあの池はな、本当ならあれほど簡単に崩れるわけではないんだ」

タケルは涙に濡れた眼を開けた。そんな顔に語りかけるのはつらかった。

「……長年この山を歩いとるからわかるんだが、あそこが崩れたということは、もう最悪の事態なんだ。きっと他にも崩れている場所があるだろう。」

……ダム建設推進派――といっても反対派はわしぐらいだが――彼らの大義名分、つまりダムが必要だという一番の理由がこれだったのだ。……もともと鉄砲水など水害の多い地域だからな。

……だからといって、あんな美しい場所を誰にも知られぬまま……人工の湖に沈めていいわけではない！　うううっ――」

「博士!!　――もうそんな話はいいよ!!　どうしてみんな、ぼくばかりに、ああしろこうしろって言うの!?　母さんを看てやれ、しっかりしろ、父さんの分までがんばれ……ぼくもう疲れたよ!!」

タケルはその場に突っ伏すと激しく泣き出した。

取り乱したのは博士のほうだった。

「お、おい、タケル」

手を差し伸べようにも、体が動かない。

ただただ泣きじやくるタケルを眺めているしかなかった。

——そういえば、この子には大声を上げて泣くだけの資格が十分ある。なのに周りの大人は、誰ひとり気づいてやれなかった。彼のことならよく知っていると思っていた、わしでさえも。

博士は自分自身を深く恥じた。

西の雲がわずかに赤みを帯びている。豪雨を降らせた台風もようやく去った。

ふたりは大きな力に挟えぐられ、削り取られた崖の端っこにいた。あと少しズレていれば大量の土砂に飲み込まれ、今ごろは土の下だったろう。

そんな緊張感に包まれながらも、むき出しになった土は、どこか懐かしいにおいがする。

その中で、タケルの鳴咽は、じょじょに小さくなっていた。

遠くでゴゴゴと音がする。

「——博士、行きます」

タケルは倒木を支えにして立ち上がった。

「……そうか、行ってくれるか」

博士は右手を出し、タケルはその手を握った。

「ここから斜めに降りていけば大丈夫だろう。陽が暮れる前に降り切るんだ。ただし足許に細心の注意を払ってな」

「はい」

「一番最初に見つけた家に飛び込みなさい。おとなを見つけたら、消防署に連絡してもらおうように言いなさい」

「わかりました」

「さあ、行け」

そう言つて博士はタケルの体を押し出した。

「博士は……」

「わしか、わしなら問題ない。傭兵学校ではこういう時の生き残り術も習っておるから」

にこりと笑つた博士にタケルもつられて微笑んだ。

「できるだけ早くおとなの人たちを連れて戻ってきてます」

「待ってるぞ」

タケルは、足首まで土に埋まりながら、ゆっくりと歩き始めた。振り返るとまた泣いてしまいそうなので、真っ直ぐ前だけを見つめて、一步一步確実に急斜面を降りていった。

眼前には木々の陰が黒々と交錯していた。

山の中はひどく暗かった。梢が見えないほど天高く聳^{そび}える木々の群れがタケルを威嚇した。青々と繁る葉が幾重にも重なって、その奥に舌なめずりする怪物を潜ませていた。さらに下草が足に絡みついてタケルの体力を少しずつ奪っていった。初めは恐怖に打ち克つために歌など口ずさんでいたが、疲れが感覚を麻痺させ、暗がりにも眼が慣れると、怖いという感覚がいつしか消えていた。携帯電話は相変わらず『圏外』のままだ。時計表示が無情にもタケルを急き立てる。

——そして午後六時をまわった頃。

タケルはとうとう道に迷ってしまった。

もともと道などなかったものの、斜面を低いほうへ低いほうへ、夕映えの空を見上げながら太陽の沈むほうへと歩いてきた。

しかし今タケルは複雑な起伏を持つ森の深みにはまり込んでいた。空は木々によって覆われ、ほとんど見るこゝとができない。

次の一步を出す方向が分からず、タケルは途方に暮れてしまった。どちらに眼をやっても同じに見えるのだ。このままでは明るいうちに下山するどころか、タケル

自身も遭難してしまう。博士を救い出すことができなくなってしまう。

タケルをいま動かしているのは“博士の救出”、この一点に尽きた。それには是が非でも明るいうちに救援隊を呼んでくる必要がある。

——でもこのままじゃ……。

タケルは地べたに座り込んだ。膝が痛んだ。ポケットから取り出したハンカチはすでに真っ黒だ。それでも汗をぬぐうと、大きく深呼吸した。

——とにかく方向が分からなければ、どうにもならない。たしか木の年輪を調べれば……。

しかし見渡すどこにも、役に立ちそうな切り株はない。木を切る道具もないし。八方塞がり。

タケルは大の字に寝ころんだ。あわてるな、何か手段があるはずだと自分に言い聞かせながら。

その眼の前、いや頭の上を、ぼうつとした光が横切った。びっくりして起きあがった顔のそばを今度はいくつもの光がふわりと通り過ぎる。

蛍だ——。

無数の蛍が尻から光を放ちながら飛んでいる。

暗がり背景に弧を描きながら飛ぶ様子は、いつか見た流星群を連想させた。それはメルヘンでありファンタジーの世界だった。

彼らはみな一様に同じ方向を目指して飛んでいく。タケルは彼らについていこうと決心した。

——“光の河”だ。

タケルは確信した。

36

蛍が描く光の軌跡は、毛糸であやとりをするような嫺たおやかさで、タケルの瞼の裏に焼き付いた。

タケルは誘われるままに体を浮かし、両腕を飛行機の翼のように広げると、疲れていたことも忘れて蛍のあとを追いかけ始めた。蛍もタケルを仲間と認めたのか、タケルと編隊を組んで飛翔していく。タケルの足は軽やかさを増した。もはや地面の起伏など気にならない。一匹の蛍になって森の中をすり抜けていく。

——夢でも、こんなことがあったような……。

蛍たちは虚空を乱舞し、タケルに喝采を送った。

視界が開けた。木々の間から人工物が見えた。

タケルは足を止めた。蛍の姿はすでにない。

人工物は立方体の印象を与えた。

何だろうと首を傾げていると、雲間から久しぶりの太陽が姿を現した。そのまばゆい光線に照らされた人工物

を見て、タケルはあつと声を上げずにいられなかった。
波多野御殿だ。

すぐに気づかなかったのも無理はない。いつもは低い町の方角から見上げる存在だったからだ。いまこうやって見下ろせば、こまごまとした屋根や装飾の付いた建物が、まるで玩具のようだ。

御殿の向こうにはタケルの生まれ故郷の町が一望できた。今頃はどの家も夕食の用意に大わらわだろうか。帰宅途中の人らしい姿も、走る車も、アリのように見える。

波多野御殿の裏は急峻な屏風岩になっている。タケルは降りる場所を探した。するとその岩に斜めに走る細い道があるのに気がついた。人の手によって作られたもので、手すりが付いている。タケルは難なく降りることができた。

御殿に遮られて陽光の届かない裏庭に降り立つと、そのまま礎石のそばを右方向へと進んだ。角をめぐると、御殿の大きな通用門が眼に入った。数台の車が吸い込まれていく。中にある広い駐車場につながっているのだ。

駆け寄って中を覗き込んだ。人がいる。

—— 一番最初に見つけた家に。

博士の言葉を思い出した。しかし波多野家に博士のことを知らせても、味方になってくれるとは思えない。ど

うしよう。

高級そうな外車を誘導していた人が戻ってきた。制服を着て、先にライトの付いた誘導灯を持っている。彼は折り畳み椅子に腰掛けると、脇のテーブルに置かれた皿に手を伸ばした。そして爪楊枝でチクワを刺すと、ポイツと口に放り込んだ。

37

もぐもぐと美味しそうにアゴを動かし、飲み込むとまた皿に手を伸ばす。今度もチクワだ。タケルはそれを門の陰からじーっと見つめていた。

「ん……？ なんだー、坊主」

チクワ氏は二十代後半だろうか、タケルに気づいた。タケルは見つけたのを幸い、おずおずと前に出ていった。

「こんなとこで何してんだー？」

タケルはチクワ氏の面前に立った。そして大きく息を吸い込むと一気にしゃべった。

「ここは危ないですよ。山が崩れてきます。早くみんなに逃げるよう伝えてください」

「へ？」

チクワ氏は爪楊枝を持った手を止めて、タケルの顔

を斜交いに覗き込んだ。タケルがそののんびりした態度に苛立ち、さらに言葉を継ぎ足そうとしたとき、背後でブーブーと警笛が鳴った。驚いて振り返ると黒塗りのタクシーがタケルのすぐそばで停車した。後部座席が開き、降りてきた人物を見てタケルはさらに驚いた。新幹線で出会った、アノ苦手なおばさんだったのだ。

「ちよつと、アナタ」

おばさんはチクワ氏にてきはきと話しかけた。

「こんなところで子供を遊ばせないでちょうだい。危ないでしょ！」

そう捲^{まく}し立てるとハンドバッグを振りながら、てきはきと自動ドアをくぐり抜けて建物内に消えた。タケルの顔には眼もくれなかった。

「……はえー、なんとまあ、けたたましい……」

チクワ氏はぽかんと口を開いたまま、おばさんを見送った。タケルも突然のおばさん登場には心臓が口から飛び出るかと思った。

自動ドアが再び開いて、やはり制服を着たチクワ氏と同年輩の男性が、両手に缶ビールを持って出てきた。しきりに後ろを振り返っている。

「……おい、久々に見たよ」

「見たって、あのおばさんかー？」

「そうよ。ただのおばさんじゃないぜ。かつては米沢に

その人ありと云われた女傑、波多野みず様だ」

「波多野……ってーことはー」

「現当主波多野守の実の姉よ。今日のパーティーに関西から馳せ参じたってわけさ。もっとも姉弟の仲はあんまり良くないらしくて、帰省してもここ数日は分家のほうに滞在してるらしいがな」

チクワ氏と違って口がよく回る。彼はテーブルにビールを置くとようやくタケルに気づいた。

「その子供は何だ？」

38

「はえ？」とチクワ氏。

制服ふたりに注目されてタケルは再び緊張した。

「坊主、まだいたかー。危ないからよそで遊べ」

チクワ氏はタケルが言ったことなどすっかり忘れてしまったらしい。タケルは今度はもうひとりのビール氏に話しかけた。

「ここは危ないんです。山が崩れようとしています。みんなを避難させてください」

しかしビール氏はドングリ眼を大きく見開き、タケルを上から下まで眺め回していたと思ったら、突然ふっと吹き出した。

「ははは、おい少年、何だその服装は。あちこちすり切れてボロボロじゃないか。山遊びもいいが、そんな格好で歩き回ったらお巡りさんに捕まっちゃまうぞ」

てんで聞いてない。

「本当なんです。ぼくは山崩れに襲われて――」

「ハイハイ分かりましたっ。一体全体誰がそんなことを少年に吹き込んだんだい？」

タケルはまなじりを決したが、すぐには答えられなかった。

「……博士です」

「ナニ博士？」

「……新出博士」

「ニイデ？ おいお前知ってるか？」

チクワ氏に振る。

「いや知らな……んー、そういやーそんな名前の博士つてのがいたっけー。動物の着ぐるみ着て、夜な夜な町の中を歩き回るとかいう。ケケケーなんて妙な声を張り上げてー」

「違います！」

タケルは腹が立ってきた。しかしビール氏は、ニヤついた顔でビールをテーブルに置きながら、

「じゃあ、その博士を連れてきなよ。なんで子供を使いに――」

そのとき別の車が入ってきたため、ふたりはその場を離れた。タケルは辛抱強く待っていた。しかし戻ってくるとビール氏は言い放った。

「まだいたのか少年。今日はな、県議候補のパーティーのお客様相手に忙しいんだ。変なこと言つてパーティーに支障をきたしたらオレたちが怒られらあ。さあ、もうお家に帰れ帰れ！」

そう告げると、ふたりはビールのフタを開け、チクワをつつき始めた。

タケルはあきらめて外に出た。悔し涙が出た。

ふと妙な音が聞こえた。裏の屏風岩を見上げると、はるか上の方から小さな岩が転がり落ちてきた。いくつも、カラコロカラコロと。

39

駐車場奥に止まった車から男がひとり、息せき切つて走ってきた。

「いまここにいた子供はどこに？」

「へ？ 子供ー？」

チクワ氏が間延びした声で応える。

「どっか、その辺にいるんじゃないのー」

男はあわてて通用門の外に飛び出したが、すでに影も

形もなかった。

「タンクさーん。どうしたんっスかあ？」

大きなカメラケースを抱えたホーダイが、よたよたと近づいてきた。

「いや、タケル君かと思っただが……」

「急がないとパーティー始まっちゃうスよ」

「——そうだな」

タンクは踵^{きびす}を返した。

波多野御殿の立つ台地から全速力で駆け下りてきたタケルは、街角の電柱に背をもたせかけ、呼吸を整えようとした。あらためて御殿の背後に連なる山々に眼を走らせてみる。夕陽の残光が山々を染める色は危険信号の赤だ。耳を澄ますとかすかに地鳴りの音が聞こえるような気がする。急がないと博士が危ない。いや、それだけでなく——。

タケルは眼を転じた。町並みの大半は夕闇に沈み、店や家の中は電灯がともっている。

街角では、上着を抱えて汗だくのサラリーマンが家路を急いでいる。部活を終えた中学生たちがゲーセンで遊んでいる。共働きのなか、ほか弁の袋を自転車の前カゴに山積みしたお母さんが駆け抜けていく。あちこちから賑やかな音が、美味しそうなにおいが流れてくる。

この町に、崩れた山から大きな岩が転がってきたら、土石流が押し寄せたら……その先は想像したくない光景だ。タケルは頭を掻きむしった。

「どうやってみんなに知らせる？」

タケルのすぐ前を、女子高生が携帯で楽しそうに話しながら通り過ぎた。

「あつ。どうして思い出さなかったんだ！」

タケルはポケットから携帯を取り出した。当然、電波状態は良好だ。すぐさま電話をかけた。

「プルルル。ピッ。」

『「もしもし、タケルか？」』

「祖父ちゃん！どこにいるの？」

『「わしか……えーっと、いま駅前から国道を北に向こて走つとる。先生の車や」』

「それなら近い。」

「じゃあね、ぼくの通ってた小学校に来て！」

タケルは最後の力を振り絞って駆け出した。

「タケル！」

「祖父ちゃん！」

ふたりは互いに駆け寄り、ひしと抱き合った。祖父

ちゃんは着慣れたライトグレーの作業服姿だ。服から実家のおいがする。すぐ隣には空色のサマーセーターにジーンズという普段お目にかかれない軽装の井沢美代子先生がいた。

「大和くん、無事でよかったわ」

「先生、わざわざ来てくださって——」

「独身だからね、ヒマなのよ……」

先生は涙ぐんでいた。タケルはじーんとした。

待ち合わせた小学校はすでに定時を過ぎて校門が閉められていた。先生の赤い車は校門のすぐ前に止めてあった。

タケルは、ふたりの矢継ぎ早の質問を制止して、これまでの経緯を手短に説明した。しかし危険が迫っているという話には、ふたりともなかなか二の句が継げないようだった。

「山が崩れるですって？」

先生の驚きにタケルはうなずいた。

「町が飲み込まれるつちゅーんかいな。こらエラいこっちゃで……。まず警察か消防署に」

「ダメ、ここの警察は当てにならないよ。それに今にも崩れ始めるかもしれないんだ。テレビか何かで緊急放送するくらいじゃないと」

「そうは言うてもなあ、それこそ一庶民の我々の言葉を

信じてくれるとは思えんし」

タケルは自分の膝をパチンと叩いた。ひらめくものがあつたのだ。

「先生、祖父ちゃん、車に乗って！」

「ど、どうするの？ 大和くん」

「あとで説明します。ぼくの家があつた場所に行ってください」

三人は車に乗り込み、発進した。

「でも、あつこは到着してすぐタケル捜して行ってみたんやけど、もう家あらへんねんで」

タケルは夜の道をナビゲートしながら、自分のアイデアを話した。予想どおり祖父ちゃんは難色を示したが、先生は「一刻を争う時だからいいんじゃないかな」と言った。

スーパーハタノはまだ営業中だった。駐車場に車を滑り込ませると、三人は暗闇を透かし見た。狙いは当たった。街宣カーが一台止まっている。選挙事務所は灯も消えて静まりかえっており、辺りに人気はない。みんなパーティーで出払っているらしい。タケルの作戦はこの街宣カーを使わせてもらおうというのだ。しかも無断で。

車を降りると三人は背を低くして街宣カーに近寄った。井沢先生がドアを開けようとすると、

「やっぱりキーがかかってる。どうしましょう。ガラス割る？」

今日の先生はなんだか過激だ。

「キーがないとエンジンかけられないよ」

「あ、そうね」

先生はペロツと舌を出した。そのとき、後ろで見っていた祖父ちゃんが咳払いを一つすると、前に進み出た。

「ちよつといいかな」

そう言うと、どこで手に入れたのか、持っている針金を奇妙な形に折り曲げて、わずかに開いていた窓ガラスの隙間から差し込んだ。先端がガラスとドアの間に吸い込まれる。祖父ちゃんは聞き耳を立てながら針金をゆつくりと上下左右に動かした。

カチツ。その音ははっきりと聞き取れた。

「開いたよ」

ドアノブを引くと確かに開く。

「すつごーい。お祖父さま。天才」

「そりやそうだよ。祖父ちゃんは工業高校の先生だったんだもん」

「そっかー。実践的な授業もされてたんですね」

「アホな！ ……こんなこと教えたりはせん」

年輩の先生が若い先生をたしなめる図だ。言葉が標準語に戻っている。

祖父ちゃんは運転席の下に屈み込んで「泥を喰らわば皿まゝでよ」などと浪曲口調でブツブツ言いながら、しばらく配線をいじっていた。何してるんだろうとタケルが覗き込むと、いきなりエンジンがかかった。先生が手を叩いた。

「スゴすぎー」

「感心されるようなことではない」

「早く行こうよ。見つからないうちに」

三人は乗り込み、車を発進させた。先生の車は駐車場に置いていくことにした。

街宣カーはワンボックスカーだ。祖父ちゃんが運転し、井沢先生は助手席に乗り込んで拡声装置のスイッチに触っている。タケルは後部座席からふたりに指示を出した。

「最初にいた目抜き通りまで戻って！」

「了解。——先生、その機械の使い方は分かりそうですか？」

「大丈夫です。昔、バイトでウグイス嬢やったことがあるんです」

「そりゃあいい。一発デカイ声で頼みますぞ」

「エッ——私がやるんですか？」

42

タケルも祖父ちゃんも何も答えない。頭の中では、井沢先生が高らかにマイクに向かって話す絵しか想像できなかった。

先生はふたりの顔を交互に見ていたが、やがてため息をつき、

「分かりました。やってみます。でも何て言えばいいのかしら」

それが問題だ。

「この車は波多野って候補さんの車なんですよ。ここへ来る道中でお祖父様にお聞きしたけれど、この辺りの名士なんですってね」

「メイシって？」タケルが訊ねた。

「社会的に名の通った、つまりは有名人よ。大和くんのお父さんも大変お世話になったとか」

「それは!!——違う……かも……」

「何だね？ 何が違う？」祖父ちゃんが問う。

タケルが説明すると祖父ちゃんも顔色を変えた。

「たまげたな……。するとなにか、父さんは波多野守にハメられ……ダメされたっちゅーことか」

ハンドルを握る手に力が入る。

「ひどい話」

先生が顔をそむけるように言う。

「――男なんてウソツキばっかし……」

かすかに漏れたつぶやきがタケルに聞こえた。ガラスに先生の眉間に走るシワが映っている。

タケルは数日前のことを思い出した。あのとき先生は学校の駐車場で泣いていた。悲しんでいた。もしかすると先生は《失恋》したのかもしれない。今日の先生がいつもと違うのは、そのせいなのだろうか。

街宣カーは目抜き通りにやってきた。祖父ちゃんは車を路肩に止め、ふたりのほうを振り向いた。

「いっそ、波多野の名前を使ったらどうかと思うんだが」

「名案だと思います。早速草稿を作りましょう。大和くん、博士さんから聞いた山の状況をもう一度教えて」

さすが先生、テキパキしている。

五分後、いよいよ“街宣”がスタートした。

『ご町内のみなさま、いつもお世話になっております、波多野守、波多野守でゴザイマス。本日はみなさまにお知らせすることがあります。今日の昼まで激しく降りま

した雨のため、この町の東側に面した山が崩れるおそれが出てまいりました。大きな土砂崩れが発生する可能性があります。みなさま、至急、避難してください』

43

井沢先生の透る声が、夜のしじまに響き渡る。町行く人が何ごとかと立ち止まって見つめている。お店やスーパーの中から飛び出してくる人もいる。街宣カーはゆっくりと進みながら、なおも避難勧告をつづける。

始める直前、ねんのために警察、消防署、市役所には電話を入れた。どこも鈍い反応で「そのような連絡は受け取っておりませんが」とにべもない返事だった。一応「調査してください」とだけは祖父ちゃんの重々しい口調で伝えた。

車は駅前のロータリーに入った。ここから駅前通りを西へ向かうつもりだったが、半周ばかりを回ったところで駆けつけてきたパトカーに行く手を阻まれた。

「止まりなさい」

五十がらみの警官が、数人の若い警官を引き連れて、前に立ちふさがった。

「あんたたち、なんだね？ 選挙の車をこんなことに使ってはいかな」

「山崩れが起ころうとしてるのよ。あなたたち警察の方も住民に避難するよう——」

「そんな情報は入っておらんですよ。とにかく署のほうで話を聞かせてもら——」

「そんな悠長なこととして、町が土砂に飲み込まれたらどうするんですか？　警察はどう責任を取るつもりですか？」

先生の剣幕に警官は押され気味だ。腫れ物に触るような応対なのは、こちらが波多野の名前を掲げているからだろう。無下に否定することもできず、苦虫を噛みつぶしたような顔をしている。

タケルはそのやりとりを聞いている最中、無性に心が騒ぎ、そつと車を降りた。そして後部ドアに取り付けられた梯子で屋根に上った。そこは街頭演説にも使えるよう設えられてあった。名前が大書された看板が手すりの代わりだ。

下の喧噪をバックにタケルは眼を山々に注いだ。駅前からも波多野御殿とその背後の屏風岩がよく見える。ちょうど最後の夕陽が岩の上端を赤く染め、あと少しで消えようとしていた。

その一端が崩れ落ちるのが見えた。

スローモーションで御殿の裏庭に落ちていく。崩れた辺りから砂煙が舞い上がっている。

「あれを見て！」

タケルは下に向かって大声で叫んだ。つかみ合わんばかりにしていた先生や祖父ちゃんや警官の動きが止まった。タケルは若い警官のひとりを手招きした。警官はムツとした顔で上ってきたが、タケルの指し示す方向を見て驚愕した。

44

「け、警部！ 山が崩れてます！ 本当です！ 本当に——あああ」

叫び声をあげている最中にも、岩壁はどんどん崩壊していく。ズズズンという身の毛もよだつ音がここまで響いてくる。

呼ばれた警部もあたふたと上ってきた。先生も祖父ちゃんも顔だけ出している。

崩落した岩塊のひとつが、御殿の裏手にある塔を直撃した。グアーンという激しい音と共に塔は御殿の内側に倒れていった。

おーっというどよめきが起った。駅周辺や通りにいたすべての人が、最初の崩落を目撃したのだ。タケルたちの街宣がなければ普段の喧噪に溶け込んでしまい、人々の気づくのが遅れただろことは想像に難くない。

次々に剥落する屏風のあとから、今度は大量の水が滝のように噴き出してきた。水は御殿を直撃し、屋根の日本瓦を弾き飛ばした。

「警部さん、早くみんなを避難させないと！」

先生が横から叩きつけるように言葉を浴びせる。警部はそうだと喚きながら車を降りた。

「この車で避難勧告をつづけてもいいですね？」

すっかり舞い上がってしまったらしく、警部は赤べこのようにウンウン頷くだけで精一杯だった。

すでに町なかは大騒ぎになっていた。我がちに逃げ出す人で、駅前通りはごった返していた。

「みなさん落ち着いて！ できるだけ高台へ！ スーパー波多野のあるほうへ逃げてください！」

どこまで聞こえるか分からなかったが、先生は叫びつづけた。

山崩れが起こった時、波多野御殿の大広間ではパーティーが盛大かつ華やかに催されていた。

『波多野敬造の喜寿を祝う会』と銘打たれたパーティー。表向きは守の父親であり一昨年まで県会議員を務めていた敬造が主役だが、現在選挙運動中の息子、守を応援する会合であることは誰の目にも明らかだった。

「そうそうたる顔ぶれが揃ってるスね」

「まあな。しかし選挙運動の期間中にヤルたあ、見え見えでタマンねえぜ」

会場は立食パーティーだ。部屋のすみでビール片手に言葉を交わしたのはタンクとホーダイ。

「トイレ行くふりして、さつき上の階を覗いてみたんすが、タンクさんの言うとおり、エライ嚴重な警備でしたよ」

「忍び込むなんてお茶目なこととはできんなあ」

そのときだった。激しい振動が部屋を揺らした。

45

グラスが床に落ちて割れ、悲鳴があがった。誰もが何ごとかとキョロキョロしているところへ、今度は、天井全体を震わす轟音が鳴り響いた。

「わ、わ、なんスカこりゃ？」

「分からん。とにかくテーブルの下に潜れ！」

会場は阿鼻叫喚の場と化した。腰を抜かす者、出口に殺到する者、点滅する照明をポカンと見つめる者――。

その中で影の主役、波多野守の朗々たる声が響き渡った。「みなさま、大丈夫です。この建物は万全の耐震設計で造られております。万が一にも倒れることはありません。どうか落ち着いてください！」

しかし耳を貸す者はほとんどいない。タンクもホーダ
イの袖を引っ張って、扉のひとつに向かった。

「ふざけた奴だな波多野って野郎は。地震が天井から来
るかつつの」

「それじゃ何なんスか？」

「分からねー。ひとまず退散しようぜ」

しかし廊下に出たタンクの向かったのは出口のある階
下ではなく、上り階段だ。

「どこ行くんス？」

「バツカヤロー。こんないチャンスに泡食って逃げて
られつかよ。ちよつくらお茶目、働こうってわけさね」

タンクは一気に五階まで駆け上った。目指すは波多野
守の書斎だ。間取りは事前に調べ上げて頭に叩き込んで
ある。彼は中庭に面した廊下に出た。

案の定、さきほどの原因不明の衝撃のせいで、人影は
見えない。中庭に面した全面ガラスはことごとく割れて
いる。

タンクは夏の夜気が吹き込む窓から屋根の上を見上げ
た。しかしそこにあるはずの塔はなかった。塔は中庭に
逆さまになって倒れ込んでいたのだ。

「テ、テロか？」

じいっと見てみると、次はシャワーのような音が聞こ
えて雨が降ってきた。いや雨ではない。山から激しく鉄

砲水が噴き出しているのだ。

「ハアハア、やっと追いついたスよー」

やってきたホーダイは廊下にへたり込んだ。と同時に
イタタと叫んだ。

「気をつけろ。ガラスの破片が落ちてる」

「早く言ってほしいっス！」

「それより見ろよ、この光景。撮つといたほうがいいんじゃないか？」

ホーダイはうわーと声を上げ、ガラスの刺さった痛みも忘れて、倒れた塔にカメラを向けた。

タンクは廊下を横切つて書斎の扉と向き合った。

46

扉の大きなノブにかけたタンクの手が震えた。

これじゃコソ泥と同じだ。酔った勢いだとか、パー
ティーの座興だとかいう理由は通用しない。しかしここ
までお膳立ての揃った状況を見逃すほど彼の意志は強く
はなかった。いや、ジャーナリスト魂が勝つたといふべ
きか。

タンクが見たいと強く念じているもの、それは「念
書」だ。波多野守が某政治家と取り交わした念書。タン
クは執拗な取材の中から、ギリギリのツテを頼つて、そ

の存在を確認した。両者で取り交わされたその念書には、波多野の息の根を止められるほどの事柄が記載されているというのだ。それがあるとすれば当然この部屋だろう。タンクは武者震いを鎮めながら、ノブを回し、書斎の中に“侵入”した。

敷き詰められた絨毯が彼を出迎えた。その先に執務机があつた。広い部屋の左には暖炉があり、右にはカウンターがある。タンクはしばらく部屋の調度を細かく観察していたが、机の向こう側にある書棚の、とある箇所を目を止めた。

小型のシャッターだつた。タンクは不自然なそれを“金庫”だと直感した。おそらくシャッターの向こうの金庫の中に“念書”はある。

しかし——ここまでだ。

シャッターの鍵や金庫を開ける数字を書いた紙が、引き出しにポイッと入れてあるはずはない。金庫をこじ開けるほどの技術があるわけでもない。

——それじゃなぜ、ここへ来た？

いつも理詰めで考える俺らしくない行動だ。本能のおもむくまま、欲求のほとばしるままに来てしまった。したら御馳走を前にお預けときた。

ばかばかしい。

笑い話にもなりやしねえ——。

「貴様、何者だ！」

廊下から誰何する声すいかが聞こえてきた。ホーダイが見つかったのだ。律儀に「スンマセン」と答えている。振り返ると半開きだった扉をくぐって、当の波多野守自身が入ってきた。

「貴様もここで何をしておる！」

「いやあー、トイレを探してたら道に迷いまして……なんて言い訳は通じないか」

タンクは不敵な笑顔で応えた。

「見覚えのある顔だな。——そうか、この前ウチの事務所に来た三流記者か。大した記事が書けそうもないから、ネタを求めて、とうとう家宅侵入まで働いたというわけか」

波多野の眼が、眼鏡の奥で怪しく光った。こいつタダモンじゃねえ。タンクはゾクツとした。

47

波多野守は机の引き出しを開けた。身構えたタンクをよそに、波多野はタバコを取り出し、口にくわえて火をつけた。

「何をしてる。早く失せろ」

波多野はタンクに煙を吹きかける。

「やさしいんだな。警察に突き出さないのか」

「知ってるだろう。私はいま選挙運動で忙しい。雑魚に付き合ってる暇はない」

ズズンとまた大きな音がした。

「あの騒々しいのは、いったい何だ？」

「フン——後ろの山が崩れてきたのだ。岩のデカいの
が屋根に落ちた。貴様らも早く逃げたほうが身のためだ
ぞ」

こつそり近寄ったホーダイが小声で、

「タンクさん、逃げましょうよ」

しかしタンクはそれにかまわず、

「あんたは逃げないのか？」

「ここは私の家だ。私に指図するな！」

波多野は胴間声を張り上げた。

「大切な書類を持たずに逃げられないってか？」

波多野が大きく目を見開いてタンクを睨みつけた時
だった。

ドドーン。

鼓膜が裂けるかという大音声と共に、天井が落ちてき
た。さらに壁がいやな軋み音を立ててゆがみ、こちらに
向かって倒れてきた。

タンクとホーダイは絨毯の上に仰向けに転がった。絨
毯は下から持ち上げられ、ソファや調度品を乗せたまま、

ふたりに襲いかかってきた。

「ホーダイ、こっちに来い！」

タンクは火のない暖炉に飛び込んだ。ホーダイもあとに従った。

照明が消え、あたりは真っ暗闇になった。書棚横の小さな窓から差し込むわずかな月明かりが、部屋の惨状を浮き上がらせていた。

「波多野！ 無事か!?」

タンクの問いに「ううう」という呻き声がした。

部屋は依然、ガクンガクンという振動を伴って動き続けている。何がどうなっているのか想像もつかない。タニツクのようにこのまま海の底、いや地の底に引きずり込まれるのか。

タンクは暗い部屋の中を見回した。

いた。波多野は机と壁の間にはさまれ、書棚から落ちた本の山に埋もれていた。

「た、助けて……くれ」

「そういう時は『助けてください』と言うんだ」

「たすけて……くだ……さい」

タンクは暖炉を飛び出し、本の山に飛びついた。

タンクは本をどけ、重い机を力まかせに動かした。波多野は口から血を吐いていた。タンクは彼を抱えて暖炉へと這うように戻った。チラリと投げた視線の先に、壊れたシャッター越しの金庫が見えた。未練はあるが、命あつての特ダネだ。

「ホーダイ、おまえ怪我はないか？」

「大丈夫っス。カメラも無事ス」

暖炉は三人の体で満員だった。波多野守は気を失っており、だらしなく投げ出された両足をタンクは折り曲げて暖炉の隅に引き入れた。

しかし押し曲げられた天井や壁が、無慈悲にも彼らに向かつて迫ってくる。

「タンクさん、ここまでっスカねえ！」

「あきらめるんじゃねえ！ 横の金網をしっかり握ってろ！」

ぐらりと暖炉が後ろに倒れた。と同時にまるでワイヤーの切れたエレベーターのように、三人は暖炉ごと落下し始めた。

「うわーーーーー」

波多野御殿は完全に崩壊した。

峻厳な屏風岩と美しい木々に縁取られて、城のように町を見下ろしていた威容は、背後から崩れ落ちた岩に押

し潰され、大量の土石流に飲み込まれて、町の目抜き通りまで押し流された。

山崩れは他の山間部でも起きていたが、ここが最大級だった。町の住民は手際よい誘導によって西の高台へと避難したため、夜にもかかわらず混乱は少なかった。

特筆すべきことは、被害が最小限におさまったことだろう。最初に崩れたのが屏風岩と波多野御殿だったのが幸いした。剥がれ落ちた岩や、壊れた屋敷の壁などが、土石流をせき止める防波堤の役割を果たしたのだ。駅周辺や山手の十数軒が被災しただけで済んだのは奇跡だった。

さらに奇跡だったのは死者が皆無だったこと。若干の重軽傷者や、行方不明の者を除いて――。

気がついたとき、タンクの目の前にあったのは人の屍だった。

「この野郎！ ホーダイ！」

パンチを見舞うと、ウツと妙な声があがった。

「ホーダイじゃねえのか？　ありゃ波多野だ」

泥だらけの波多野守が虫の息で倒れていた。

空が白み始めている。周囲には泥と土砂と水たまり、そして倒れた木々が散乱していた。

タンクは泥の中から抜け出すと、波多野を背中に負っ

て、泥を避けながらゆつくりと歩き出した。

49

「タンクさん！」

「おお、タケル君！」

ふたりは再会した。駅前には作られた緊急対策本部の脇にある救護所の前だった。

「ここで何をしてるんだい？」

「祖父ちゃんらといっしょに、怪我人を運んだり手当てしたり、お手伝いしてます」

「偉いな。それじゃこの御仁もよろしく頼む」

言われてタケルは、タンクが人を背負っているのに気づいた。しかし気を失っているその顔を見たたん、アッと叫んだ。

「波多野のおじさん……」

「そうだ、波多野守だ。壁にはさまれて血を吐いたから内臓ぐらい破裂してるかもしれねえ。手当てしてやつてくれ」

「じゃ、じゃあこちらです」

タケルはタンクを案内した。そしてどうにか空いているベッドを見つけ、波多野を寝かせた。

「さてと——それじゃ行ってくるな」

「どちらへ？」

「ホーダイだ。眺めたところまだ発見されてないようだ。戻って探してくるよ。またあとでな」

「気をつけて」

タンクは残骸と化した波多野御殿の方向に取って返した。

ホーダイの姿は、タンクたちがいた場所よりさらに上のほうにあった。

「タンクさーん。会いたかったっスー」

「情けねえ声出すなよ。怪我はないか。——待て、カメラのこと訊いてんじゃねえぞ」

「三脚は無事っス」

「生身の足は無事じゃないのか!? ええおい！」

「……そんな怒んなくなつてえ。軽い捻挫ス」

タンクは相手にせず、辺りを見回した。高級そうな家具や調度品が土砂にまみれて散らばっている。火事場泥棒なら稼ぎ時だ。

ふと、頭の中に何かよぎるものを感じた。

どこか近くに自分と呼んでる奴がいる——。

タンクはふらつと足を踏み出した。

ズボリと泥にはまっても、かまわず前に進む。

——この辺だ。

タンクは両手で泥を掻き分け始めた。

「タンクさーん。何してるんスカー」

応えずさらに泥の下をまさぐる。硬いものに手が当たった。周囲の泥を除けていく。

金庫だ！ エラいもんが出てきやがった。こんなデカブツ、持ち逃げすることもできやしねえ！

50

金庫は、大きさからして百キロはあろうか。

タンクは石ころを拾うと、金庫に目がけて投げつけた。ゴンと音がして、石はタンクを嘲笑するようにあさつての方向へ飛んでいった。

「簡単に盗まれちゃあ、意味ねえもんな」

タンクは泥の上に座り込み、物言わぬ金庫を精一杯、睨みつけた。

——ん、気のせいかな……。

——俺に見られて金庫の色が変わった……？

気のせいではなかった。グレイに塗装された表面が、徐々に赤みを帯びてきたのだ。特に顕著に変色しているのが上部である。最初は暗い赤から、だんだん明るいオレンジに変わり、いまや眩しいほどの白に変貌している。タンクは自分の眼が信じられなかった。しかしさらに

信じられない光景がつづいた。バーナーの火にも似た強烈な光を放っていた金庫の上部が、ボンツと跳ねたのだ。火山が噴火するように。

跳ね飛んだ物体が、周囲の水たまりに飛び込んでジュツと音をあげた。煙も立ちのぼった。まちがいはなく高温に熱せられているのだ。金庫は内部からの熱で溶かされているのだ！

超自然的な光景はさらにつづいた。

金庫の上にぽっかりと穴があくと、そこからは黄金の光が空中にあふれ出た。

タンクは光に魅せられて恍惚とした。

しかし光が見えていたのは、わずかに数秒の間で、終わりは唐突に来了。光線はすっと消えたかと思うと、赤く光っていた金庫は元のグレイの金庫に戻っていた。

ただし、大きな穴はそのままに。

タンクは理解を超えた現象を前にして声も出せなかった。しかし突然脳裏によみがえるものを感じて彼は叫んでいた。

「そうだ！ あの光はマグマといっしょに地下から吹き飛ばされた……」

その先の言葉が見つからない。記憶が薄らいでしまっている。どこで見た？ 夢の中か？ たしか“溝の帯”ではぐれた彼と――。

「タンクさーん、どうしたんスかあ？」
間の抜けた声に思考は中断された。

「ホーダイ！ おまえ、いまの見たか？」

「なにを？」

どうやら呆けたまま、空でも眺めていたらしい。

「バカヤロー！ おまえは一生たそがれてろ！」

その光を見た者が、ほかにふたりいた。

タケルの眼には、あの光だとすぐに分かった。

51

「あんなところに……」

タケルは窓越しに黄金の光を凝視した。不審に思った隣の男性が、

「どうしたんだね」

と問いかけ、タケルの視線の先に眼をやったが、その時すでに黄金の光は消えていた。

「出発していいかな」

操縦士がタケルに顔を向けた。

「ハイ。お願いします」

扉が閉められると、タケルたちを乗せたヘリコプターは勢いよく空に舞い上がった。いよいよ新出博士を捜し

に行くのだ。

台風は各地で猛威を奮った。そのため手配したヘリコプターはなかなか来ず、太陽がかなり昇った時間になつてやっと到着したのだった。

タケルのやきもきは頂点に達していた。ヘリコプターはぐんぐん高度を上げたが、タケルの逸^{はや}る気持ちはずつと先に飛んでいた。

「マズいな。危険地帯にまだ人がいるぞ。本部に連絡してやれ」

波多野御殿跡を見下ろして、レスキュー隊員がつぶやいた。タケルの眼はそれがタンクであると判別できた。

タンクは四角い物体の上に乗っている。何かを覗き込んでいるらしい。あそこは、さきほど黄金の光が放射されたあたりではないか。

ヘリが岩壁の上を通過したため、タンクの姿は視界から消えた。

もうひとり、光を目撃した者は樹上にいた。彼は森林に囲まれ、方向を確かめようとしていた。その辺りから西に向けて、山肌は大きく抉^{えぐ}られているのが見える。木々は土石流に薙^なぎ倒され、巨大な戦車が通った跡のよう^うに前方が開けていた。

黄金の光は、朝陽に負けぬ神々しきで、天に向かって

放たれていた。

「あの光だわ」

光は次の瞬間にはもう消えていたが、サユリはしばらく手をかざしたまま余韻に浸っていた。

タタタタタ。

ヘリの音にサユリは我に返った。こちらに近づいてくる。サユリはポケットから白のミッフィーハンカチをつかみ出すと、大きく振った。ヘリはすぐに彼の存在に気づき、旋回を始めた。

「あそこ！」

タケルが真っ先に発見した。サユリのハンカチが、木の下を激しく指し示しているのが見える。

52

「着陸してください！」

タケルが、回転翼の騒音に負けない大声で叫ぶと、レスキュー隊員が振り向いた。

「彼が新出博士なのかね？ 君に聞いた風貌とはかなり違うようだ」

「あの人じゃありません。下にいるんです！」

「どうして分かる？」

「合図してます！」

隊員はあらためて眼を凝らした。そして言った。

「君の視力はすごいな」

どうにか空き地を見つけ、ヘリは着陸することができた。扉を開けると、タケルは全身で湿度の高さを感じた。久しぶりの晴天が山に溜まった水分を蒸発させ、薄く朝霧を発生させている。

ざく、ざく。タケルもレスキュー隊員たちも足音のする方向を見た。

黒ずくめのバイクスーツに身を包んだ大きな男が近づいてくる。スーツはあちこちが破け、顔や手足に血がにじんでいる。

そして——彼が両手に抱きかかえているのは、まぎれもなく新出博士だった。博士は薄目を開け、タケルに微笑みかけた。

どう考えても金庫には不似合な代物だ。しかし、この物体がさっきの光を発したことは否定できないとタンクは思っている。これほどの厚みを持つ金庫を溶かして穴を開けた。ありえない——いやじっさいこの眼で見ただから、ありえたのだ。でも——堂々巡りだ。どういうからくりなんだ？

こわごとと手を差し伸べてみた。指先でツンと突つつく。若干の温みはあるが大丈夫そうだ。彼は両手を穴に差し込み、その物体を持ち上げた。

——やはり。

夢に見た——いや、夢で見た“黄金塊”おうごんかいだった。

——なぜ、こんな場所に。

タンクはしばらく疑問の嵐と格闘していた。だがカサという紙の音に、再び穴を覗き込んだ。

たちまちタンクは現実に取り戻された。

——そうだ、俺にとっては“黄金塊”以上の黄金がこの金庫に眠っていたんだった！

彼は“黄金塊”を脇にそっと置いた。そして穴から紙束をつかみ出すや、一枚ずつ丹念に調べた。

そしてついに目的のモノを発見した。

タンクは、ふと眼を上げて“黄金塊”を見た。

——俺を波多野の書斎に誘ったのは、オマエなのか？
ひょっとして山形行きに誘ったのも。いや、そもそも取材する気にさせたのも。

「タ、タ、タンクさん!!」

叫び声に顔を向けると、ホーダイが自分を目ざして

走ってくる。後ろに新たな土石流を率いて。

ゴゴゴゴゴゴ。

「バ、バカヤロー。そんなモン連れてくるな!!」

「知らないっスよー。怖いっスよー」

タンクは大事な紙束を上着の内ポケットに入れると、ホーダイと並んで逃げ出した。しかし二三歩走ったところで、アツと後ろを振り返った。

——“黄金塊”。

「立ち止まっちゃダメっスー」

タンクはあきらめて、ホーダイの後を追った。

土石流はものすごい速さで追いかけてくる。タンクは死にものぐるいで駆けた。駆けながら上着のポケットを服の上から押さえた。その感触に、複雑な思いをめぐらせながら。

新出博士は即日入院となったが、肋骨が数本折れ、足はひどい捻挫というだけで命に別状はなく、タケルを安堵させた。

「アタイが連中を締め上げるのに手こずったんで、あなたたちを追いかけたときは、もう日暮れ寸前だったわ。おっそろしく崩れた場所に行き当たったんで、ねんのため「オーイ」って声をかけてみたの。そしたら「ハーイ」って返事が返ってくるじゃないの。崖の端から覗

き込んだら、それが博士さんだった。そこからが大変。いつ崩れてくるか分かんないし、思い切って飛び降りてやった。博士さんは動けないっていうから、抱っこしたままずっと降りてきた。さすがに両腕が疲れたわ」

ベッド上の博士が苦笑した。博士は下山してすぐこの病院に入院したのだ。

「胸に痛みが走るので、負ぶってもらうわけにもいかず、迷惑をかけたよ」

「ところでキョウスケたちは、どうやって締め上げたの？」

タケルは訊かずにはいられなかった。

「もうナイフや銃はなかったんで、腕つぶし勝負よ。見せたかったわ、十対一の死闘。でも最後は正義は勝つ。で全員地下室にブチ込んできたってわけ。町の救世主に乱暴を働いたんだから、今頃、警察で絞られてるでしょうね」

「ケイサツかあ。ムネオなんかすぐに出てくるんじゃないかなあ……」

救世主の博士は病院でもVIP待遇だ。当然病室も広い個室である。その個室の扉があわただしく開き、井沢先生が息を弾ませて飛び込んできた。

「大変よ!! ニュース観た!？」

井沢先生は、ベッド脇のTVに取り付くと、急いでリモコンのスイッチをONにした。

映った画面の隅に『報道特別番組』とある。

「ラララ、これ対策本部のある駅前じゃないの」

「やはり全国的にも大きなニュースだったのか」と博士。しかし先生は首を横に振った。

「違うのよ。聞いてて」

先生はヴォリュームを上げた。

『――今朝、某紙にて報道された、昨年のダム疑獄の真相に、各界は大揺れに揺れております。スクープされた書類はいわゆる“念書”の形で取り交わされたもので、そこには波多野守県会議員候補とダム建設がらみの政治家や各省庁の官僚との間で交わされた密約が事細かに明記されておりました。』

現在、波多野容疑者は、米沢市内の病院に入院中で、警視庁は容態を確認した上、今日中にも逮捕に踏み切る意向です』

画面には病院の全景が映し出された。

「あら、ここじゃない」とサユリ。「やーねえ。おんなじ屋根の下にいるなんて」

CMになったので、みんな口々に話し出した。

「ね、驚いたでしょう」と先生。「なんでも一昨日に崩れた御殿の跡から発見されたんですって」

先生は一通りの知識を得てから来たらしい。

「しかし、いくら予期せぬ自然災害といっても、そんな大事な書類が、よく簡単に見つかったものだな」とは博士。

「波多野自身、金庫に入れてたものが流出するわけないって怒鳴ってるんですって」

「そんなことまで報道されたの？」とタケル。

「いいえ、下のナースステーションで看護婦さんが教えてくれた」

TVはニュースに戻った。

『スタジオにはスクープされたフリージャーナリストの丹内九州男さんにお越しいただきました。丹内さん、よろしくお願いします』

『お願いします』

タケルはアアッと叫んだ。

「知ってる人？」先生が尋ねた。

タケルはウンウンと頷きながら、食い入るように画面を見つめた。

『――私が強調したいのは、長年、かの地に君臨してきた波多野家の罪業のみならず、昨年不当逮捕の末に亡くなられた大和武彦氏は無実だったということなのです』

タンクはきっぱりと言い放った。いや、どこか怒りを抑えながら話しているようにも伺える。

55

タケルは、胸の奥底から熱いものがこみ上げてくるのを禁じ得なかった。なんと、公共の電波で“父さんの無実”がハッキリと語られたのだ。

『——今後、捜査が進めば、波多野が大和さんに罪を着せようとしたことが明確になると思われます。いや明確にされないといけないでしょう。』

さらに、一昨日の山崩れをいち早く伝えてくれた、亡き大和武彦氏のひとり息子、武君^{タケル}、そして彼の友人である新出勘太郎博士^{かんたろう}の勇氣に、心から敬意を表したいと思っています』

タケルは眼を丸くして博士を見やった。博士は泰然とTVを眺めながら、口を開いた。

「昨夜遅く、彼、丹内さんがここへ来たんだよ。タケルの父さんのことも、去年の事件のことも驚くほど詳細に調べておった。この機を逃さずに一気に解決したいと言うもんだから、わしの知る限りのことを教えてやったわい——タケルにもいずれインタビューさせてほしいと言うとったぞ」

そうだったのか。タケルはもう一度、画面のタンクを見つめた。報道番組の性質上、出演者は一様に渋面を並べているが、タケルにはタンクの顔が彼らしくないように思われた。

扉が開き、祖母ちゃんに電話をかけに行っていた祖父ちゃんが戻ってきた。

「玄関のほうが、ごった返しておったよ。博士とタケルの話を聞かせろって報道陣がぎつしりだ」

「まあ……アタイは早く消えたほうがよさそう」

「そうなんですか。博士、どうなさいます？」

「タケル、どうする？」

タケルはしばし黙考してから答えた。

「タンクさんの取材だけ受けたいと思います」

インタビュ―の場所は、その日の夕刻、博士の病室にセッティングされた。

博士は井沢先生に介助されてベッドの上に半身を起こした。すぐ横の丸椅子にタケルが座って、タンクと対峙した。ホーダイがしきりに写真を撮る。井沢先生と祖父ちゃんが同席した。

先に祖父ちゃんが口火を切った。

「まずお礼を言わせてもらいたい。丹内さんがテレビであんなに持ち上げてくれたおかげで、どうやらわしらの

暴挙はお咎めなしになりましたわ」

街宣カーを盗んだことや、無許可で避難を呼びかけたことだ。

「いいえ、見事なアイデアだったと思いますよ。最初に聞いたとき、思わず笑ってしまいましたが、タケルさんのアイデアだそうですね」

タンクはそう言って、ようやく笑顔を見せた。

56

タンクのインタビューは微に入り細を穿ったため、取材時間はゆうに三時間を超えた。終盤に差しかった頃は、すでにとつぷり日が暮れていたが、互いに質問したりされたり、談笑も混じったりで、なごやかな雰囲気の中に時間が過ぎていた。

タケルにとって初めての単独旅行。博士と合流してからの山中縦走。悪ガキたちとの対決。どの話もタンクをいたく唸らせた。タンクは今回の事件の全貌をまとめて、本にするつもりだという。

「しかし、ダム疑獄を暴くのが主体なら、わしらのことはあまり関係ないのじゃないかな」

博士はあけすけに尋ねた。

「いいえ。私はただの暴露本や社会派ドキュメンタリー

にはしたくないんですよ。できれば、そう、タケルくんを中心に、タケルくんの目線で書ければ、と思っす」

タケルはあわてた。

「そんな——ぼくの目線って……」

「ははは。どんな本になるか、仕上がりをご覧じろ。いずれ校正を送るからチェックしてほしい」

タケルは訳も分らないまま、ウンと言った。

「それじゃ長時間ありがとうございます。博士、ご養生ください。タケルくん、玄関まで送ってくれるかい？」

タンクとホーダイは皆に礼を言って部屋を辞し、タケルと共にエレベータに向かった。

玄関を出ると駐車場に見覚えのあるレンタカーが止まっていた。

「——タケルくん」

「はい」

「じつは——」

ふたりは足を止めた。タンクは少し言い淀んだが、すぐに言葉をつないだ。

「妙な話なんだけどね、今回の取材——」

「——事件の取材」

「そう。これが——何というか、俺は自分の力でやった

ような気がしないんだなあ」

「……………」

「ありていに言っちゃまうと、俺がスクープした例の『念書』だ。じつのところ、あれは金庫の中に収まってたんだよ。——頑丈な金庫にな」

タケルは黙ってタンクの顔を見つめた。

「それがどうして俺の手に入ったと思う？」

そのことは病室では触れられなかった。

——光。タケルの口からぼそつと漏れた。

「そ、そうなんだ。君にも見えたのかい。光が!?……金庫がね——溶けて穴が開いたんだよ」

タンクは頭を掻きながら苦笑した。

57

「冗談だと思うだろ。かついでるんじゃないかと。俺も他人から聞いたら、バカにするなって——」

「信じます!!」

タケルは勢い込んで叫んだ。タンクはじつとタケルの顔を見ていたが、やがて口元をほころばせ、

「ありがとうよ——。でも、あれが現実か夢か、いまもって分からねえんだ。もちろん念書が手に入ったんだから夢のはずはねえんだが……。」

あの光が君にも見えたんなら、少なくともこの眼は信用してやつてもよさそうだ――。

あの夜、俺は念書を前にして頭を抱えちまったんだ。ずっと追っかけていた書類だからうれしくないはずはなかったが――複雑な気持ちだった。

俺はあの光に導かれてここに来たのか、操られるままに取材してきたんじゃないだろうか――。

そう考えると何もかもイヤになっちまったんだ。自分の意志なんてなかったんじゃないか、どこまでが俺なんだ、って。

――他人と折り合いをつけるのが下手で一匹狼になった俺が、誰かの手先になってたなんて、許せることじゃねえ！ その日はせつかくのネタをどこにも伝えず、酒かつくらってフテ寝しちまったよ……。

ところが真夜中にポカツと眼が覚めた。そしたら無性にいい気分なんだな、これが。記憶しちゃいねえが、何だか痛快な冒険をした夢を見たんだ。爽快な気持ちだったなあ。

そしたら――どうでもよくなっただよ。

今回の山崩れだってそうだ。自然の力を見くびるこたあできねえ。ひとりの力はちっぽけだからおのれ独りじゃ敵わないのは道理だ。

だからこそ――助け合わなくちゃならねえ。俺らしく

ねえ言葉だけだよ。ははは」

タンクはテレで頭を掻いた。

「ひとりで何だつてやってやる、信用できるのは自分だけ——思い上がったんだな、俺は。今日インタビュースさせてもらって痛いほど分かったんだよ。いろんな人間が自分たちのできるギリギリのことをやったんだなって。それがうまく連鎖反応を起こしたり、偶然が重なったりして、事件の解決に至った……」

俺は念書を手に入れた直後、また土石流に襲われたんだ。すぐに逃げたが、土石流の流れは恐ろしく速かった。間一髪で助かったのは対策本部がすでに機能して、^{どのう}土嚢を積み上げたり、二次災害を防ぐ体制が整っていたからなんだ。

——つまり俺とホーダイにとって、君と博士は命の恩人なのさ」

58

タンクはタケルと目を合わさず、レンタカーのほうを振り向いた。ホーダイが荷物整理を終えてカメラのレンズなどを拭いている。彼なりに気を利かせているのかもしれない。

「ホーダイ——口野ってカメラマンは見かけ以上に凄腕

なんだ。自分じゃあんまし気づいてねえが本当にいい写真撮るんだ。俺はどこへ行くにもあいつを連れて行く。いずれどこかで花を咲かせてやろうと思っっているが……考えてみりゃ、俺はあいつにも支えてもらってんだ」

タンクは夜空を仰いだ。タケルも見上げる。満天に星が満ち満ちていて、あの台風が嘘のようだ。

「俺が誰かに操られてたかどうかなんて、もう気にしねえことにした。今回のことで俺とホーダイの名前が、ちったあ売れるだろう。これはチャンスだ。神様か誰だか知らねえが、俺に白羽の矢を立ててくれたことは光栄に思わなくっちゃな。

支えたり支えられたり、チャンスをもたらったり。俺たちの真価が問われるのは、これからどう活かすか——さ」

タンクは手を差し出した。タケルはその手をがっちり握った。

「つまんねえ話を聞いてくれて、ありがとうな。

なんだか君ならちゃんと聞いてくれそうな気がしたんでな」

「いえ——ひとつ質問していいですか？」

「なんだい？」

「金庫の中から光を出していた物は何だったんですか？」

「うん、それがこれくらいのもの——」

タンクは両手を合わせて、ソフトボールぐらいの大きさを示した。

「金色の岩だったんだ。人の顔にも見えたな。結局、土石流に飲み込まれちゃったが、見つかんねえだろうなあ」

やっぱり、とタケルは心の中で納得した。

タンクはタケルの肩にポンと手を置いた。

「それじゃ、これで失礼するよ」

「はい」

歩き出したタンクは途中で足を止めた。

「そうそう、あの美人の先生、何てったつけ？」

「井沢美代子先生」

「その井沢先生——博士といい雰囲気だったな」

「えっ？」

「気づいてなかったか——ははは。博士は独身だし、ちようどいいじゃねえか。五十男にもようやく春がめぐってきたかな」

言い残してタンクは車を出した。

タケルは病室の前で立ち止まった。中で博士の調子っ

ばずれな声をする。それにかぶさるように井沢先生の樂しそうな声が聞こえてくる。

タケルはちよつと悩んだ末、ノックして入った。

「なんだ、タケル。ノックなんかして」

博士が不思議そうな顔でタケルを見た。

「ねえねえ、大和君、これをご覧なさい」

博士の布団の上に積まれているのは膨大な手紙の山だった。タケルは近寄って一通を取り上げた。

「——これ、英語？」

「どれどれ」と博士が手を伸ばす。「ああ、これはフランス語だ」

「他にもね、ドイツ語、中国語、ロシア語、スペイン語、イタリア語……アラビア語もあるわよ」

「何のお手紙なんですか？」

「博士へのファンレターよ」と先生。

「違う違う」

博士はあわてて否定すると説明してくれた。

「どうやら山崩れやらダム疑獄事件のニュースで、わしの名前が世界中に流れたらしい。友人らが心配して見舞いの手紙をくれたんだよ」

それにしてもすごい量だ。

「博士ってじつは友達いっぱいいたんですね」

「はっはっは、まあ国内じゃみんな煙たがって近寄らん

からな」

「電子メールのメールサーバ、今頃パンクしてるんじゃないかしら」

「そうかもな……ウチのパソコンは全部壊されてしまったし、まいったなあ」

「私、ノートパソコン持ってきてるんですよ。よかったら使われます？」

「ああ——そうさせてもらおうかな」

「ちよつと待っててくださいね!!」

そう言つて、先生は軽やかな足取りで部屋を飛び出していった。

——テンション高すぎるよ先生。でも博士とのコンビは悪くないかも。

祖父ちゃんが新聞片手に駆け戻ってきた。きつと病院の人には騒々しい病室と思われてるだろう。

「博士さん、これを見てください」

「なんでしよう」

バサツと置かれたのは夕刊だった。その一面の見出しを見て、博士はウーンと唸^{うな}った。

「何なの、祖父ちゃん」

「うん、警察署長が逮捕されよったんや」

署長が逮捕？——署長つてムネオの父親だ。

「例の念書には署長の名前も出とったんや。内部監察官

に事情聴取されて全部自白したらしい」

60

「悪人一掃って感じですか……」

博士はため息混じりにつぶやく。

「以前から調査されておったらしい。この機に乗じて一網打尽というか……都合のいい話じゃな」

祖父ちゃんもうつむいて丸椅子に座る。良かったと素直に喜べないのは、腐敗が長きに渡ったことに対する憤りがあるからだ。

コンコン。ノックの音がした。

博士のどうぞという答えに入ってきたのは見知らぬ三人組の男だった。地味なスーツ姿で、ひとりは手に花束を持っている。

「はじめまして、私どもは山形県庁から参りました。新出勘太郎様と大和武様ですね？」

県の人間がなぜここへと、ふたりは訝^{いぶか}しんだが、用向きを聞いて驚いた。

ふたりに『名誉県民』の称号を贈呈したいという申し出だったのだ。彼らはその伺いに来室したという。三人は何卒^{なにとぞ}お受けくださいと頭を下げる。

「エラく急な話ですな。無論、受けるも受けないも、私

らの自由なんですか？」

すげなく博士が言うのと三人はあわてた。そしてさらに頭を深々と下げて何卒何卒と懇願する。

「受けようよ、博士」

タケルが耳打ちした。博士は意外そうな顔をしたが、肩をすくめると三人に向かって、

「分かった。お受けしよう」

と答えた。三人は冷や汗をぬぐいながらも、じつは贈呈式を明日にも行いたいのだが、お怪我で無理なら知事が直々にこちらへ伺うが、いかがでしょうかと、事務連絡をつづけた。

「わしの怪我なら案ずるに及ばん。明日、県庁に伺いますと知事にお伝え願おうか」

それを聞くと県庁職員たちは平身低頭、ほうほうの体で帰っていった。

「タケル、どうして簡単に受けようなどと？ 本来なら議会承認が必要な『名誉県民』だぞ。しかも明日贈呈だなどと焦りおつて。いま県を覆っているダークなイメージを、わしら使って拭い去ろうという魂胆だ。今まで散々悪者どもをほったらかしにしておったくせに……嫌みのひと言も浴びせてやりたくないか」

「うん——でも、いいチャンスだから喜んで受けたいなと思ったんです」

タケルの脳裏にタンクの言葉がよみがえっていた。
“これはチャンスだ”。

「まあな……わしひとりなら断つとったが……」
そこへパソコンを持った先生が舞い戻ってきた。

「博士!! 設定できましたよ。接続しましょ♥」

61

病室はVIP仕様だから、壁にはちゃんとインターネット接続用の端子が付いていた。

「それじゃあ、ここにパスワード打ち込んで」

先生は嬉々として指示している。

「なるほど、こうして——と、つながったぞ」

「あたりまえですよお、それじゃ次はメーラーを立ち上げて……いざ受信!! ——ああやっぱり。メールたくさん届いてますよ」

タケルも横から覗き見しようと伸びをした。すると突然ノートパソコンがしゃべり出したので、思わずのけぞって、背後の壁に頭を打ち付けた。

「スゴい、このメール、音声メッセージ付き」

「イタタ……ど、どこの言葉ですか、それ」

「怪我はないか?——スワヒリ語だよ」と博士が答える。
「無事でいるかどうか訊いてくれとる。タンザニアの学

者だ」

「タンザニアって——」

「アフリカだ」

翌日も快晴。朝から暑くなりそうだ。

貸衣装を電話で問い合わせたところ、サイズを伝えるや貸衣装屋の店主がありったけの正装着を抱え、あたふたとかけつけてきた。どうぞお使いください、料金はいいませんと下にも置かない。

タケルと博士は互いに顔を見合わせていると、外が騒々しくなってきた。見ると病院前はものすごい人だかりになっている。マスコミの姿もチラホラ。「ヤマトくーん」と叫ぶ黄色い声も聞こえる。どうやら名誉県民の話が町に広まったらしい。それがこの上を下への大騒ぎに発展したようだ。

元より平凡な町が全国規模で注目されているのだ。盛り上がりがないわけではない。単純にお祭り気分の者もいれば、商売につなげよう、おこぼれにあずかろうという算盤づくの者もいる。病院さえも例外ではなく、入院費は「別の方からいただいておりますので」という始末だ。

博士は包帯巻きの上から服を着た。大丈夫ダイジョーブと言っているが、やせ我慢のようだ。

県庁に向かおうと玄関を出たところで壁に阻まれてし

まった。ふたりを大勢の市民が取り囲んだのだ。
「新出博士、ひと言コメントをお願いします!!」
「きやータケルくんこっち見て携帯撮らせて」
「博士、同じ町内の者ですがどうかサイン書い」
「大和くんアタシのこと覚えてる？ 隣の席の」
「博士！ パソコンをお求めなら是非我が店の」
「おーい大和ー、俺たちいまでも友達だよな」
もはや引くことも進むこともできない。

62

人波にもみくちゃにされた経験などないふたりはどうしていいか分からず困惑した。困惑しても周囲の人々は彼らにタカるのをやめない。

「な、なんて現金な連中だ!! ついこの前までわしのことを胡散臭い眼で見とったくせに!!」

「博士!! ぼく、足が宙に浮いてます!!」

病院内に戻ろうと振り向くと、彼らを見送っていた看護師や医師らがまだ並んで拍手をつづけている。中には万歳三唱を唱えている老先生もいる。ふたりは困惑を深めた。

とにかく約束通り来ているはずの送迎車まで行かねば。博士は右手でタケルの手を握り、必死で人間版土石流を

掻き分ける。だがさっぱり埒^{らち}があかない。進んでいるかどうかも分からない――。

「うおおおおおおおおおおお!!!」

奇妙な咆哮が響き渡った。

あまりの音量に誰もがハタと動きを止めた。

人の声というにはあまりに奇矯な声色だった。

その人々の間をブオンブオンという排気音と共に大型のオートバイが近づいてきた。

「サユリさん!!」

「お待ちっ」

ウインクを投げながら進むサユリが人波に道を作ってくれた。ふたりはその後に従った。

「あちらにお迎えの車が来てるわよ」

博士がサユリの指さす方向を見ると、人の頭の間に黒塗りの大きな乗用車が止まっているのが見えた。

「すまん、サユリくん。ところで――」

「ハイハイ頼まれてた件ね。確認してきましたわよ。山小屋に残されてた博士の動物たちは、二日前ちゃんと保護されてました。動物園駆け回って一頭一頭この眼で見てきたから大丈夫」

「おお、ありがとう、恩に着るぞ!!」

タケルたちはバイクにつかまって付いていく。その後をやはり人々が追いかけて、それぞれが勝手に話しかけて

くる。マイクがタケルの頭を小突く。唾^{つば}が顔に降りかかる。もはや誰が何を言ってるのかさっぱり聞き取れない。ようやく送迎車に到着した。例の地味な三人組があらわててドアを開ける。博士は怪我が痛むため乗り込むのも一苦労だ。

「——サユリさん」

「なあに、タケルちゃん」

「ぼく、サユリさんのバイクに乗って行きたい」

それを聞くとサユリは眼を大きく開け、体全体を喜びで震わせた。

「よくぞ言ってくれたわ」

63

サユリはタケルの腰に手を掛けると、軽々と持ち上げて後部シートにストンと降ろした。なぜか周囲にひしめく群衆はオオツと声を上げ、携帯のフラッシュを絶え間なく光らせた。

「アタイの腰にしっかり張り付いてるのよ」

サユリはタケルに注意を促すと前に向き直って、ウオオオオと吠えた。度肝を抜かれた人々は後じさりした。

サユリのバイクはヴオンとひと声、排気音を鳴らすや急発進した。

驚いたのは県から派遣された三人組である。

「た、大変だ!! 逃げた!!」

ふたりを所定の時間までに県庁へ連れていくのが彼らの使命である。彼らのリーダー格であるメガネの男が、併走することになっている白バイ警官のところまで走っていた。ハーレーの大きな白バイにまたがって悠然と構えていた警備隊長も話を聞いて、あわてた。

「な、なんだと、逃亡? 非常識な!!」

ふたりを無事に県庁まで護送するのが彼らの使命である。彼は同僚の白バイたちに命令し、すぐさま追跡しようとしたが、ここでも群衆の存在が邪魔をした。今や病院の前は道路を埋め尽くすほどの黒山の人だかりだった。「はっはっは、こりゃケツサクだわい」

博士は県が用意した車の中で手を打って喜んだ。

「我々も出発します。どうぞお席に深く腰掛けてください」

メガネの男は、身を乗り出す博士を制して、車を発進させた。この上また博士に怪我でもされたら減俸ものだ。タケルの行動に驚いたのは井沢先生も同様だ。ごった返す状況に、出発まで時間がかかるだろうと道路地図をめぐっていたところ、前方からどよめきが起こったのだ。チラツとサユリのバイクがタケルを乗せて走り去るのが見えた。

「お祖父様、私たちも出発しますよ!!」

バイクは風を切って突き進む。

サユリのヘルメットをかぶったタケルは、飛ぶように過ぎていく風景を楽しんでいた。

気持ちがいい。今日も朝からぐんぐん気温が上昇していたが、こうしているととても涼しい。

「ねえ、いま何キロ出てるの？」

「だいたい百キロってとこよ」

タケルは眼が点になった。まだ町の中だ。どうしてそんなにさせる？ やっとタケルは気づいた。

「だめだよ、信号は守らないと!!」

「あら、そう？」

64

タケルにたしなめられてサユリは安全運転に切り替えたが、じつに巧みに信号をパスしていく。

「ホホホ、だってアタイの町だモン」

追走する白バイたちは全然追いつけないでいる。タケルはますます愉快になった。

道は町をはずれ、国道を北上していく。米沢と県庁のある山形市を直接結ぶ高速道路はない。『米沢南陽道

路』と『東北中央自動車道』があるにはあるが、その間がつながっていないのだ。

「サユリさん、ぼくは明日、関西へ帰ります」

「あら——それは残念ね。さみしくなるわ」

「夏休みの登校日があるから帰らないといけないって先生が言うし……。本当は博士の怪我が良くなってからにしたかったんだけど——」

「……」

道の両側では稲穂が風になびいていた。信号の数は減り、走りは快適さを増した。

「アタイ、旅に出ようと思うの。思っていたの」

サユリはおもむろに話し出した。

「落ち着いたら高校中退して、バイクで日本一周しようかと。そしたら博士に言われたわ。とりあえず卒業しろって。あと半年で、日本一周したい理由やら見たい物をレポートにして提出しろって言うのよ」

サユリは大きな声を立てて笑った。

「さすがにそれはご免こうむるけど、博士の言いたいことは分かるわ。物を観る眼を養つとけてことなのね。できるかどうか自信ないけど、とりあえずこれからは旅の準備のつもりで勉強するつもりよ——何にせよ目標って大事よね」

「それじゃ京都に来たらウチに寄ってくれる？」

「当たり前きよお」

『そのバイク、止まりなさい!!』

突然、空から声が降ってきた。いつの間にかヘリコプターが追いかけてきていたのだ。背後には数台の白バイがようやく接近してきた。

「うわー、まるで映画みたいだよ」

「ホントね、ウフフフ、もっと面白くしてあげましょうか？」

サユリはハンドルを切って国道から脇道に折れた。これに泡を食ったのは白バイ隊だった。曲がりきれず数台が転ぶのが見えた。

「ざまあご覧なさい。警察のくせに威張るんじゃないわよ」

『こらー、そのバイク、ふざけるなー。少年を返せー、返してくれー』

田舎道をヘリのけたたましい声がこだまする。道路を知り尽くしているサユリは無敵だ。

タケルは詳しくなかったが、サユリのバイクはオフロードタイプというもので、舗装された道路よりも悪路を走ることに長^たけたバイクだった。白バイが迫ると、ツ

イとタイミングを外して川に降り、砂利の上を走ったりする。そうかと思えば林に突入して急斜面を駆け上ったりする。まさに変幻自在。警察は完全に翻弄された。サユリはパトカーが出動してきても、いっこう気にせず、我が道を往った。

山形市内に入るまでの五十キロの行程は、タケルにとつてめくるめく時間だった。

「このままずっと走りつづけたいわね！」

サユリは言った。タケルもそうしなかった。

県庁前に到着したとき、警官たちは疲労困憊の極地だった。

「おつかれさま」

ふたりは蔵王の山を背に、建物に入っていた。

博士を乗せた車と井沢先生の車もやがて到着した。タケルの話を聞いて先生と祖父ちゃんは呆れかえったが、博士は腹を抱えて笑い転げ、すぐ、痛い痛いとお胸を押さえてまた転げまわり、一同をひどく心配させた。

多賀橋知事は祖父ちゃんよりも年上だった。

タケルと博士は知事手ずから賞状と純銀製の名誉県民賞をいただいた。広い贈呈式会場は華やかな雰囲気にもまれ、多数の報道陣が次々にフラッシュをたき、テレビカメラがふたりを追った。

知事が博士に話しかけた。

「新出さんは私と同じ東北大の出身とお聞きしました。よろしければ同窓のよしみで今後、県の自然保護事業にご意見を賜りたい」

「考えておきましょう」

知事はタケルの顔を覗き込んだ。

「大和武君。君の御父様には大変申し訳ないことをしました。私からお詫び申し上げます」

そう言つて深々と頭を下げた。タケルはどう答えていか分からず、真似をして頭を下げた。

「昨年、君の家から検察がお預かりした御父様の所持品、ご本などはすべてお返しします」

——あの懐かしい本や写真集が戻ってくる。タケルは眼が覚める思いがした。

「それからもうひとつ受け取ってもらいたいものがあるんです。武くんに」

知事は机の上から木箱を持ち上げて、タケルに手渡した。博士に支え持ってもらつて蓋を開けると、そこには長旅に疲れたようにくすんだ色をした“黄金塊”があった。

“時空を超えて、再びめぐり逢う”。

S F 小説や映画などでよく聞く言い回しだ。
いまタケルの頭にそれが浮かんだ。

——ありえない。ありえないから フィクション F なのだ。

タケルは両手で “黄金塊” を持ち上げた。

夢で見たものと寸分違わない。ズシリと重い。

“黄金塊” は父さんの顔をして見つめ返している。

これは現実だ。

だからタケルの疑問は当然だった。

——なぜ、ここにあるの？

「おい、あのブツの写真、撮っとけ!!」

取材陣に混じっていたタンクはホーダイの肩を激しく叩いた。

「驚かれるのも無理ありません——」

多賀橋知事はタケルにやさしく語りかけた。

「かなり純度の高い黄金です。この黄金塊は波多野の屋敷跡から発見されました。

——あなたがたのおかげで幸いにも人命は失われませんでした。多数の家が壊され土砂に埋まりました。現在も山崩れのあった現場では土砂の除去作業が進められています。

この黄金塊はその中から発見されたのです。調査の結果、波多野があなたのお父様、武彦様から十年以上前に預かったものだと言明しました」

タンクは心の中で毒ついた。――どうせ、気に入ったとか何とか言って取り上げたんだろうが。――しかし波多野も神妙になったもんだぜ。

――父さんはどこでこれを手に入れたんだろう。
新たな疑問がタケルの中に浮かんた。

「――どうぞお納めください。今日は私の独断で、この場でお渡しするのが相応しかろうと判断し、持って参りました」

タケルは知事の顔を見上げた。

「お気づきになりませんか？ その黄金塊の形は、我が山形県の形にそっくりなのです」

あ――言われてタケルは見直した。確かにそっくりだ。なぜ気づかなかったんだろう。

「――我が県のシルエットは笑っている人の横顔にも見えるといわれます。いわば縁起のよい形をしているのです。この度はあなたがたおふたりのご活躍により――県のイメージが救われました。あらためて厚く御礼申し上げます」

最後のところはふたりに近寄って耳打ちした。
タケルはしっかりと黄金塊を抱いていた。

67

式次第は滞りなく終わった。タケルと博士は退室して廊下に出た途端、またもや報道陣に囲まれた。ふたりが観念して応対していると、廊下の端から大きな声がした。
「タケル!!」
弾かれたようにタケルは顔を上げた。そこには、タケルの母、由里子が立っていた。

「母さん——」

タケルは記者たちを掻き分けて前に出た。

「タケル!!」

母が再び呼ぶ声にタケルは駆け出し、母に飛びついた。後ろには母に付き添ってきた祖母ちゃんの姿もあった。その場にいた誰もが涙を誘われた。

一同は県庁を後にし、井沢先生の車と、県の送迎車に分乗して米沢へと帰った。サユリはどこへ行ったのかバイクごと姿が見あたらなかった。

タンクは遠ざかる二台の車を県庁のロビーから見

送っていた。その横でホーダイがカメラを片付けていたが、一段落するとおもむろに口を開いた。

「終わっちゃったスねえ」

「——ああ」

「よく分かんないんすが、タケル君つて住所を京都のほうに移してあるんでしょ？　なのはどうして『名誉県民』になれるんスカ？」

「昨年まで住んでたからな。それに居住者に限るつてのはあくまで原則だ。条例に書いてある」

「そうなんスカ——にしても、タンクさん、なんか今回のタンクさんはどこかヘンっスねえ」

「なにが？」

「さっきは黄金の記念品に眼の色変えてたし——この前TVに出演した時は、やたらタケル君や父親のこと持ち上げてたでしょ？　いつもは人間なんて単なる取材対象だつて言ってるタンクさんが、今回は妙に密着取材に走ってません？」

タンクは送迎車の走り去った方向を愛おしそうに見ていた眼を、ゆっくりとホーダイに移した。

「そう見えるか？」

「見えるっス」

「なるほどな——」

タンクは言葉を切った。ホーダイは次の言葉を待った。

「うまく説明できねえ。俺も今回の事件は腑に落ちねえことが多いと思ってる。おまえどう思うよ、金庫が溶け たっていう俺の話——」

「どうって……分かんねっス」

ホーダイは肩をすくめた。

68

「だろう？——発見された金庫を見た専門家も、こんな溶け方ありえねえって言うしな。まあ、うやむやになるんだろうが——。タケル君の話にしてもそうだ。山で迷って蜚に道案内されたなんて、普通なら夢でも見たんだろうって言われて終しまいだ。——でもな、俺には何だか理解できる気がするんだよ」

「まさか神の意志でも働いたなんて——」

「最初はそうかもしれねえと思った。だが——どうもそんな大げさなモンじゃないような気が今はしてるんだ。神が与えたもうた使命ってんじゃない、何かこう、親近感が持てるぐらいの“存在”に依頼されたって感じなんだな。どうかタケル君の力になってやってくれ——つて」

「タンクさん……」

「へへ、ホントに俺らしくないよな。夕べも考えてたら、

涙がこう――」

「アタマ、大丈夫スカあ？」

病院に戻った博士は、無理がたたって捻挫した足がまた痛み出し、ベッドで唸っていた。

タケルは母のために同じ階の個室を貸してもらい、ベッドに寝かせた。聞けば、祖父ちゃんの電話を受けた祖母ちゃんから、タケルが大怪我して入院したと聞き違い、自分も米沢に行くと言い出したのだという。祖母ちゃんがその体では無理だと説得しても聞かず、ひとりでも家を飛び出しかねない形相だったので、ここまで新幹線を乗り継いで連れてきたのだという。

しかし母は県庁を出るとそのまま気を失った。病室に運び込んでからもずっと眠ったままでいる。

陽が落ちた。

タケルはずっと母の枕元に座っている。

ふと顔を上げると、母の眼が薄く開いていた。

「――母さん？」

タケルの声に母はわずかに反応し、ぼんやりと視線をタケルに向けた。

「――タケル……どうしたの、そんな薄着で。風邪をひくわよ……もうすぐクリスマスでしょ？ 熱出したりしたら……ケーキ食べられないわよ」

「――母さん」

「あなた、なんだか大人っぽい顔になったわね。父さんそっくり。来年は四年生なのね」

――違うよ母さん。あれからもう半年以上過ぎてるんだよ……。

タケルはたまらず窓を見た。美しい夜景が眼下に広がっている。そして窓の手前のテーブルには“黄金塊”が置いてあった。

69

“黄金塊”は病室をやわらかく包む間接照明を受けて、あくまでも鈍く反射している。まるで本当に数百万年の時を経たように――。

防音構造の部屋は、空調の音がかすかにするだけでとても静かだ。廊下を行き来する人の足音も、隣にいるはずの博士や先生の声も聞こえない。

「――タケル、それは？」

タケルは母を見た。母が“それ”と言ったのは“黄金塊”のことらしい。

「これはね、父さんが持っていたものなんだ」

答えたタケルは、母の両眼に光が宿るのを感じた。正気に戻ったんだとタケルは確信した。“黄金塊”が眼に

映っているだけではない。

「まあ……久しぶりだわ、それ見るの。父さんが学生時代にアフリカへ行ったときのお土産だったのよ」

タケルは感情が顔に出ないよう必死に我慢したが、心の中では激しく動揺していた。アフリカから——「黄金塊」はやはりアフリカから来たのか。

「母さん——これ、なんだか父さんの顔に見えるでしょ？」

「——本当ね、そっくり」

「ぼくはね、これにずいぶんと助けられたんだよ。

道に迷ったとき、ぼくに進む方向を示してくれたんだ。
“光の河”を見せて、ぼくを連れてってくれたんだ——。
ぼくがこうしていま無事でいるのも——父さんが守ってくれたおかげなんだ……」

タケルは突然、淋しさに襲われた。

新聞に名前が載っても、知事に表彰されても。

やっぱりぼくは無力な子供のままだ。

「——それは違うわ」

突然、母が……、

「——父さんは亡くなったの。もういないの」
明瞭な発音を伴って……、

「——父さんは天国に召されたの。あなたを」

話しかけてきたのに……、

「――助けることはできない。だから」

タケルは驚いた。

「――あなたは自分の頭で考え、自分の力で困難を乗り越えてきたのよ。それを忘れてはダメ」

でも。

「でも博士や、サユリさんや、先生や、祖父ちゃんや……みんなに助けられたんだよ」

母は一呼吸置いた。

「――そうね、タケルの言うとおりね。あなたはひとりだけど、ひとりじゃなかったのね」

70

「何を言うの、かあさん！」

タケルは初めて気色ばんだ。

「母さんだってひとりじゃないんだよ。祖父ちゃんや祖母ちゃんだっているし、博士だって、先生だって。先生は県庁からここまで車が跳ねて母さんの眼が覚めないよう、ゆっくり走ってくれたりしたんだよ」

そこまでしゃべって息をついだ。

「みんな母さんを心配してくれてるんだから」
すると天井を見ていた母の眼に涙があふれた。

「——ごめんなさいね。私がこんな、だらしないばかりに……」

母は両手で顔を覆うと泣き始めた。タケルは椅子を立ち、母のそばにかがむと、その顔を両手で包み込んだ。

「母さん、いいんだよ、いまは無理しなくても。ゆつくり行こうよ、ゆつくり——」

母はタケルの腕の中で何度も頷いた。

タケルは母が静まるまでそうしていた。

やがて母が落ち着いた寝息をたて始めた。

「母さんごめんね。心配かけて——」

タケルは椅子にかけて、母の寝顔を見つづけた。

朝。博士の起床は早い。ベッドからゆつくりと抜けだし、足を気にしながら軽く運動。

食事をしながら新聞を広げ、メールをチェック。

井沢先生の来室も早かった。タケルが挨拶を告げに入ってきたとき、先生は壁に世界地図を張りつけて、その上に赤いピンを打ってる最中だった。

「何してるの？ その地図で」

フフフと先生は笑う。

「博士宛に来た手紙やメールの発信元にしるしを打つてるの。どの国が多いか傾向を見たくてね」

地図を見れば、すでに一目瞭然だ。

「アフリカでしょ？ ピンだらけだもん」

「まあね、でも南米やモンゴルにもあるわよ」

「若い頃の旅で知り合った連中ばかりだわい」

博士は妙にはにかんだ。先生の持ち込んだ空気にアテられているのやら、テレているのやら。

「でな——じつはタケル。タケルに発表したいことがあるんだ」

ギクリ。

ま、ま、まさか、先生との——婚約発表？

タケルの心臓が早鐘のように打った。

自分の眼がピクピクするのが分かった。

「わしな——来年いよいよ、アフリカに行くことに決めたんだ」

え？

71

「以前から来い来いと誘われてたんだ。タンザニアからメールが来ただろう？ 彼が率いるチームが今度調査隊を組むから是非参加しろと」

地図を見上げる。アフリカの東側を指さした。

「大地溝帯の未調査の部分を重点的に攻めるんだそうだ。すでにいくつか新しい猿人の骨が出ているとメールに書

いてあった。——それにな」

博士は声をひそめた。

「タケルが話してくれた地底人の着想、面白いと思うんだよ。進化につながりがないのは突然地底から現れたから——突飛な説だがミツシングリンクの謎はその辺にあるかもしれないな」

「地底人って何のお話？」

井沢先生が地図を離れて近寄ってきた。

「いやいやこっちの話——タンザニアはいいところだぞと教えてやっとりんだ」

「いいなあ、私も行きたい。セレンゲティ国立公園でし たつけ、動物がいっぱいいるところ」

「ええ、是非おいでください」

「ホント？ 本当にいきますよ」

おはようございます、と祖父ちゃん祖母ちゃんが入ってきた。両手には大きな鞆を携えている。いよいよ今日、みんな京都へ帰るのだ。

祖母ちゃんの後ろにタンクとホーダイの顔が見えた。

ヨツとタケルに声をかけた。祖父ちゃんは、

「ロビーにおふたりがおられたので、お連れした。他にもマスコミの人がおったが、帰ると知れるとまたひと騒動起こりそうなので、こっそりじゃ」

「タケル君、お別れだな。ところで——あれから 黄金

塊”は光ったりしてないかい？」

「今のところ大丈夫です」

「そうか。何か変化があつたら教えてくれ。アレの写真
を本の表紙に使わせてもらうつもりだ」

ハイ、とタケルは元気よく答えた。

祖父ちゃんが母さんの具合は？ と尋ねた。

「今朝はちゃんと朝食を食べてくれました」

「そりゃ良かった」

先生が博士に吐息が届く距離で話しかけた。

「残念ですわ、博士。また遊びに来ますので」

「そ——それはうれしいな。待ってるよ」

ふたりはタケルの元気な顔を眺めた。

「あの子——ここ数日で急に大人びました」

「そうさな。将来が楽しみだ」

「——私、あの子がなんだか年の離れた弟みたいに見える
時があるんです。最近夢にあの子がよく登場するんで
すけど、変なんですよ。あの子も私もね——お猿さんな
の」

え？

部屋に戻ると母は食事を終え、すでに着替えも済ませ

ていた。

「母さん、先生が京都まで、いつしよに車に乗せて行ってくれるって——」

そこで言葉が止まった。

母は窓際のテーブルを見ていた。

そこにあつたものが、ない。

いや——あつた。

こんもりと金色の砂が。

「いつの間にか、こうなつてたの……」

タケルは近寄つた。砂を手ですくうと、さらさらと指の間からこぼれ落ちた。

——使命を終えたので、これで失礼します。

“黄金塊”はそう言いたかつたのだろうか。

タケルは木箱を横にして、テーブル上の砂を全部すくい取つた。

「帰ったら、父さんのお墓に撒きましようね」

タケルは頷いた。

先生の車は小型なのでタケルと母しか乗せることができず、祖父ちゃんと祖母ちゃんは今幹線で帰ることになった。タンクがレンタカーで駅まで送りましようと思し出た。

「博士、お元気で。また冬休みに来ますから」

「タケルも達者でな」

ふたりは抱き合って別れを惜しんだ。

病院の脱出はちよつとしたスリルだった。こつそりと裏の階段を降り、駐車場までダッシュした。

博士が窓から手を振っているのが見える。

二台の車は発進し、駐車場を後にした。

やがてタンクの車にも別れを告げた。

「美味しいものでも食べながら、ゆつくり行きましよう」

先生もきつと旅人になれそうだ。母さんは後部座席で過ぎゆく風景を楽しんでいる。

タケルは助手席で風に髪をなびかせた。

ブルン。いきなり耳のそばで爆音が轟いた。すぐ横を大きなバイクが併走している。

「サユリさん!!」

「タケルちゃん!! 元気でねえー!!」

サユリが手を振った。タケルも振り返した。

サユリは何度も警笛を鳴らしながら、弧を描くようにして視界から去っていった。

「大和くん、いっぱいお友達ができたわね」

——本当に。タケルは物思いに沈んだ。

「ん?、まだ何か心配事があるの?」

「はい——夏休みの宿題」

車内に笑い声が渦巻いた。